機動戦士ガンダムGGENERATION-月光蝶の羽音

フリル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
機動戦士ガンダムＧＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ－月光蝶の羽音

【Ｎコード】
Ｎ２２６８Ｚ

【作者名】
フリル

【あらすじ】
これは、ゲーム【機動戦士ガンダムＧＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ】のオリジナルキャラクター達が黒歴史に介入し過去の作品である機動戦士ガンダムから様々なガンダムやパイロット達と出会い、別れ、そして共闘してゆく物語です。

【あらすじ】

G．ＦＩＦ１９８２年、地球より宇宙へと出た人類は、月にて一つの発見をした…それは、月光蝶の繭と呼ばれた大きな物体である事が後に分かる。月光蝶の繭を発見した人類は科学を結集させ、月光蝶の繭を１００年掛けて解析、黒歴史と呼ばれる月光蝶により無かったことにされた歴史、ＭＳと呼ばれる人型兵器、そしてそれにより運命を左右され戦った戦士たちの記憶を得た。そして同時に人類は、自身らも月光蝶により滅びる事も悟る…。滅びる事を恐れた人類は、月にある月光蝶の繭を月の地下へ封印し、管理するようになる。そのある日。人類は月光蝶の繭から一つの滅びない方法を導きだした。それは…戦う事。黒歴史へと介入し、誤った記憶を正し、無かったことにされた歴史を復元し思い出す事。それが月光蝶の繭により与えられた使命である。使命を受けた人類は、月光蝶の繭をシステムに取り入れ黒歴史へと介入する事の出来るシステム【ジェネレーションシステム】の開発と、黒歴史の中で戦う戦闘部隊【ジェネレーション・フォース】を設立するきっかけとなった。

この物語は、ジェネレーションシステムが開発された年から始まる…。

EP－1【エリス・クロード】

Ｇ－ＦＩＦ２１５０年４月、ジェネレーションシステムを完成させた人類は、ジェネレーションシステムのある月から一番近いコロニー【Ｆ－１０１０】に黒歴史介入部隊【ジェネレーションフォース】を集結させ、最初の介入をしようとしていた。

コロニーとは、増えすぎた人類が住まうための言わば偽物の地球の事である。

コロニー【Ｆ－１０１０】の中にある小さな公園に、この物語の主人公となる少女はいた。少女の名前はエリス・クロード、父親譲りの金色の髪の毛に緑の瞳、母親譲りの端整な顔立ちをした少女は、学校を途中で早退しこの公園のベンチの上で趣味の読書をしながら帰宅までの時間を潰していた。

「はぁ…」

本に疲れたエリスは小さなため息を漏らす。そして手元の新デザインの携帯画面に目を向けて時間を確認した。まだ帰宅時間には４時間以上ある。実家には母親がおり、今すぐ帰ると早退した事がバレ、怒られてしまうからだ。学校では優秀な成績であるエリスではあるが、そんな事でわざわざ心配をかけさせたくはない。

しかしエリスは今日、学校を早退したい理由があった、それは…。

エリスは目を横に向ける。どこまでも続くコロニーの見慣れた景色、空には偽りの空が広がる。しかし視線の先には巨大なオレンジ色を

した建物がある。それは正確には建物ではない船である。現在このコロニーには、ジェネレーションフォースと呼ばれる部隊が駐留しており、あのオレンジ色の艦はジェネレーションフォースの旗艦。

「【キャリーベース】…」

【キャリーベース】黒歴史内に存在したクラップ級とよばれる戦艦のデータをベースに、ジェネレーションフォース用に改良し簡易且つ練習用に造られた戦艦である。エリスは忌々しそうにキャリーベースを睨みその内に諦め、再び本に目を戻した。

エリスが学校を早退した理由、それにはジェネレーションフォースが関係していた。ジェネレーションフォースは政府の作り上げた組織であり、国民はその組織に積極的に協力するというものである。その協力というのは人員である、ジェネレーションフォースは優秀な人員を探していた。その優秀な人員とは兵士であるが、ただの兵士ではない。ニュータイプと呼ばれる素質のある人間を探しているのだ。その査定をする検査がエリスの学校で行われている。エリスは自分がニュータイプだとは思っていないしかしエリスは戦争には興味が無かったのだ。

「この世界の滅亡を守るために、他の歴史に介入して武力でもって歴史を正すなんて間違ってるわ…そんなのただの人殺しよ…」

エリスは思った事を口に出して憤りを現した。エリスは過去のジェネレーションシステム導入による戦争で父を失っている。そのために戦争とは憎しみの象徴であった。

「どうかな…」

隣から男性の声がした。エリスが顔を向けると、そこには一人の男がいた。灰色の頭に黒いジャケットを羽織り目にはサングラスが付いている。

「…！？」

エリスは突然の男の出現に驚いて飛び上がるように立ち上がる。

「驚かせてしまったか…悪い事をしたな」

男はそのまま、驚いた拍子に落としたエリスの本を拾う。

「だ！！だれですかあなた！！返してください！！」

エリスは慌てて男の手にあった自分の本を奪い取る。男は頬をかいてサングラスを外す、サングラスの下からは堅実そうな瞳がかいま見えた、瞳は鷹のように鋭く刺すようだったのをエリスは感じた。

「オレはジェネレーションフォースの隊長、マーク・ギルダーだ」

マークは手を差出し、躊躇するエリスの手を強引に取り握手する。

「…エリス・クロードです」

エリスは嫌悪の感情でマークを睨み、手を話すなりハンカチで拭う。

「知ってるさ、優等生」

マークは苦笑しながらジャケットのポケットから電子端末を取り出す。

「エリス・クロード、地球のトクラン共和国生まれ、トクラン内戦後、宇宙コロニーＦ－１０１０に移民、現在はＦ－１０１０内にあるグラウシア中学校に通学１年生から３年生まで首席、年齢は１５歳…身長と体重は…」

「言わないで下さい」

一通りいい終えたマークは、電子端末の電源を切りジャケットのポケットにしまう。

「それで…わたしに何の用ですか…」

エリスの言葉にマークはゆっくりとベンチに腰を降ろす。

「オレは君をスカウトに来た、ジェネレーションフォースとして共に戦う仲間として…」

マークの言葉に、エリスは胸を鷲掴みにされたような苦しい感覚にとらわれ目を見開く。

「そ…そんなの！」

動揺したエリスにマークは微笑み掛けた。

「残念だが既に決定されている、君の母親にも話はしてきた…喜んで君を差し出すそうだ」

マークはそうして再びジャケットのポケットに手をいれ、今度は手

配書をエリスに見えるように渡す。

エリスは手にとりその文面をまじまじと眺めた、そして肩の力が抜け、目眩を起こしそうな錯覚にとらわれる、逃れようのない事実があるからだ、母親のサインという、決定的な…。

「…母のサインです」

「当然だろう?、ジェネレーションフォースがわざわざここに旗艦と共に来たのは、ジェネレーションシステムがジェネレーションフォースに必要な逸材として君を選んだからだ、でなければ二日前に介入行動が始まっていた」

では…エリスは思考を凝らした。そして回想する…ジェネレーションフォースはこのコロニーに停泊したのは自分の責任だったのではないか?では、母親がサインしたのは何故だろうか?彼女は父が死んでから気が狂うようにジェネレーションシステムの開発に携わっている研究者だった、ジェネレーションシステムが選んだと言えばサインするだろう。

「さあ、そろそろ時間だ…行こうか」

「嫌です、わたしはジェネレーションフォースへの参加を拒否します」

エリスはマークに対して怒鳴るような声色を絞って出した。

「わたしは戦争なんてしたくない!人を殺すんですよ!?」

「オレだって撃ちたくはないさ」

しかしマークは冷徹な顔になる。

「だが戦地で相手にそんな理屈は通用しない、撃たなきゃやられる…だから撃つ、黒歴史の中には殺さない戦法を取ったパイロットも数多くいるが、オレにそんな技術は必要ない」

エリスは首を横に振り、前に出る。

「わたしはまだ１５歳です！！戦争なんて！！」

「１０歳で戦地に身を投じた子供なんてやまほどいるさ、戦争に年齢は関係ないそれに君は…」

マークはじっとエリスを見つめた。エリスはその迫力に黙り込んでしまう。

「ニュータイプだ、ニュータイプならば尚更年齢は関係ないさ」

マークの言葉にエリスは更に噛み付こうとした。

「隊長ー」

そこに一人の青年がやって来た。マークはエリスからそちらに顔を向け、エリスも青年を見た。青年は額に灰色のバンダナを巻いており、マークと同じジャケットを着ている。

「なにしてんすか…」

青年は不満そうにマークを睨んだ。マークは苦笑を浮かべる。

「何をしている…か、女学生と他愛ない会話をしているだけだ」

マークは冗談混じりに言えば、青年は頭をかく。

「またまた冗談きついっすよ」

エリスはマークに顔を向ける。

「誰です？」

エリスに聞かれたマークは青年から顔をエリスに戻す。

「奴はラナロウ」

「【ラナロウ・シェイド】だ、ジェネレーションフォースでパイロットをやってる」

ラナロウはエリスに手を差し出す。気前の良さそうな好青年な様子が伺えた。

「エリス・クロード…」

握手しようとしたエリスの手を掴んで引き、同時にエリスの腹部を衝撃が突き抜けた。

「…うぐっ！」

エリスは突然の衝撃で意識が暗くなる。その薄れ逝く意識の中で、初めて殴られていた事を確認した。

「ラナロウ！！」

マークはラナロウに対して怒鳴るが、ラナロウは大して気にする様子なく気絶したエリスをさっさと肩に担いだ。

「んな事よりさっさと行こうぜ…あまり時間を無駄に出来ねえ…」

マークは頬をかいてから渋々ため息をはきながら頷いた。

「そうだな…」

そして公園の外に停車していた車に向かう。

「ラナロウ」

向かう途中にマークはラナロウを呼び止める。

「まだなんかあるんすか？」

嫌そうな態度を表すラナロウにマークは苦笑した。

「女の子に拳は良くない」

「……」

ラナロウは終始黙り込み、小さくうなずいてから車へ向かった。

EP－2【シュミレーション】（前書き）

ラナロウにより、無理矢理誘拐されたエリスは、キャリーベースの医務室で目を覚ますのだった。

EP－2【シュミレーション】

「う…ん…」

体が重い、そんな感覚がエリスの精神を覚醒させる。石のように重く硬い瞼をやっとの事でこじ開け、まばゆい光りが闇に慣れた瞳を貫く、それはまるで槍に貫かれたような痛みと共に、景色が広がって行く。

「あ！起きた起きた！」

エリスの目の前に癖毛の目立つ女の子の顔が浮かび上がる。女の子は仕切りに誰かを呼んでいるようである。

「はいはいはいはい！」

奥からそんな声がした。そこでエリスは体を起こして辺りを見回す。辺りには清潔感のある白いベッドが並んでおり、白いパーテーションが辺りを囲う。まるで医療施設じゃないか…エリスはそう思うと同時に記憶が覚醒してくる。

「確かわたしは…公園で…」

公園での出来事を思い出し、一気に焦りが生まれる。

「起きたようだね」

現れたのは室内だというのに帽子を被り隙間から金髪のポニーテールがかいま見える。筋肉質な女性だった、ジャケットはマークやラ

ナロウと同じだが、ズボンは作業ズボンのようなダボダボした感じの服であり、油による汚れが目立っていた。

「あたしゃ【ケイ・ニムロット】ジェネレーションフォースのメカニックさ」

ケイは素直にエリスの手を取り握手を交わす。

「おー！ストライクゥゥ！なんちゃって～」

となりで先程の少女が騒いできた。

「そいつは【クレア・ヒースロー】、ただの馬鹿だからほっとけ」

ケイは呆れた調子で手をしっしっと振ってクレアを追っ払う。

「あの…」

エリスは、ケイに顔を向ける言葉を漏らす。

「お察しの通り、ここはキャリーベースの中さ…ラナロウに誘拐されて来たんだってね、可哀想に」

エリスの記憶にラナロウに殴られた事が思い出される。

「そうでした！なんですかあの野蛮な人は！！それとわたしを家に帰して下さい！！」

エリスにまくしたてられ、ケイは頬をかく。

「あいつは元々傭兵あがりだかんなぁ…まあ、後であたしがぶん殴っといてやるよ」

「坊やだからさ！なんちゃって～！」

途中でクレアが割って入り椅子を持って来て座る。

「じっとしてろ！大人しくしてろ！口を開くな！！」

ケイはそういってクレアをひっぱたき、叩かれたクレアは頭を押さえて蹲る。

「こいつがエリスより年上だなんてなぁ…」

ケイは更に呆れた様子で親指でクレアを指差した。

「わたしは…帰れるんですか？」

エリスが聞けば、ケイは何かを言おうとし。

「それは無理な質問です…」

パーテーション越しに綺麗で透き通る声が響いた。するとパーテーションの隙間から女性が顔を出した。黒一色の制服に白い肩掛けをみにつけた女性だった。

「マリア！なにも誘拐なんてしなくたって！」

「少佐を付けなさい、ケイ・ニムロット」

マリアと呼ばれた女は一言でケイを黙らせ、エリスの前に行き、一度敬礼した。

「わたしは、ジェネレーションフォースと共にキャリーベースに同乗します地球連合軍少佐【マリア・オーエンス】です」

挙手していた手を下げ握手を求める。

「何故、地球の軍人が？」

エリスの問い掛けにマリアはキョトンとする、が、すぐに確りと両目でみすえた。

「連合軍は今回のジェネレーションシステムにおける黒歴史への介入を、良くは思ってはいません…コロニー側が黒歴史の知識から開発したＭＳで地球に進行するのではないか？なんて言葉も囁かれています。」

マリアはそこで一呼吸置いた。ケイは何かいいたそうな顔をしている。クレアもとなりで退屈そうにしていた。

「そこで、わたしが同行し…あなた方ジェネレーションフォースの動きを探るよう命ぜられ今にいたります」

そう言葉を切ると、マリアは脇に抱えていた包みをエリスに差し出した。

「これは…？」

不審をいだいたエリスは、受け取った包みを膝に置き、ゆっくり開いた。それはジェネレーションフォースのジャケットとズボンだった。

「動けるならば着替えなさい、外で待ってるわ」

マリアはそれきり外へ出ていった。

「たく…せっかちなやつ…」

「あたし、あいつ嫌い」

ケイは隣のクレアの頭をポンポン叩き、エリスに目を向けた。エリスはジャケットを手にしたまま動かず震えていた。

「わたしは…兵士なんかには…」

「決めるのはあんたよ、だが今は袖を通すしかない…袖を通さないと今度は勾留されることになっちまうんだ」

「そんな!!わたしは悪い事なんてしてないのに!!」

エリスの反発にケイは欠伸程の余裕を見せた。

「あたしにとっちゃ関係ねえが…ジェネレーションフォースはあんたが必要なんだとさ…別に戦争なんてしなくたって艦にのってりゃそのうち帰れるさ…」

「黒歴史は触れてはならない過去です。それに介入するなんて！」

「仕方ねえだろ？そういう国なんだからよ」

ケイは即座に流し、エリスは黙ってジャケットに袖を通し、ベッドから立った。

「来ましたか」

外ではマリアが腕をくんだまま壁にもたれかかり立っていた。

「この艦を案内します…ついてきてください」

マリアは冷たく言いながらさっさと早歩きで歩いていった。エリスは後ろを着きながら窓を見る。外には無限の宇宙が広がっていた。

「え？…ここは！？」

「月の付近、Ｂ－３エリアよ…もうじき黒歴史への突入が開始されるわ」

マリアも目を宇宙に向けた。

「じ！！冗談じゃないです！なんでわたしもなんですか！！」

「うるせーな、ぐちぐちうぜえぞ…」

食堂からバンダナを巻いた忘れもしない、ラナロウが顔を出した。

「あなたは…」

エリアはラナロウをみるなりマリアの後ろに隠れた。

「なんだてめえかよ…」

ラナロウは愛想悪くエリスを視線から外し、それからマリアを睨む。

「おい軍人、この船ででかい面してるんじゃねえ…目障りなんだよ」

ラナロウの言葉にマリアの手に力が籠もる。

「何をしているラナロウ」

奥からマークが顔を出し、マリアと終始見つめ合う。

「…マリアっ」

「マーク!?」

マリアとマークの顔色が変わり、ラナロウはキョトンとした。

「久しぶりじゃないか、どうだ軍は?」

「あなたが抜けてから目に余るわ…あなたこそ傭兵は止めたの?」

二人は深く会話を始めてしまった。入り辛そうになったラナロウは食堂に帰ってしまった。

「あの…二人は…」

エリスは間に割って入り聞いた。

「軍の同期だ」

「恋人とかじゃないわよ？」

マリアとマークは息の合ったチームワークのような会話をした。

「それじゃ、キャリーベースに乗り込んだ軍人はお前か」

「ええ…いまはエリスさんに艦内を案内していたの」

マークは頷く。納得したように腕を組みエリスに目を向ける。

「強引に連れてくるようなやり方をしてすまなかった…」

マークはそう頭を下げた。エリスとしてはそこまでされると目くじらを立てるわけにも行かずに頭を軽く下げた。

「いえ…」

重い空気が流れる。だれもが金縛りにあったかのように動かないその中で一番最初に動いたのはマリアだった。

「さ…さあ！艦長に会いに行きましょ？ブリッジに」

「それならオレも行こう、マリアの様子を見ると、お前もあのコロニーから乗った口だろう？」

「クラップ級の戦艦は一通り乗っていますから、貴方の助けはいりませんよ」

「そういう訳にはいかんな、このキャリーベースはクラップ級とは違うのだから」

マークはそう言って組んでいた腕を解いて歩きだす。

「ついてこい」

マークに言われるがまま、マリアとエリスはマークの背中を追い掛けた。そうしてブリッジへとたどり着く。

「艦長、新しいクルーを連れて来ました」

マークが中に入るなり凄まじいアルコールの臭いが鼻を突いた。マークが中に入るとそこには女性がいた。すらっと背が高く細い女性だった。

「ご苦労、ギルダー君」

女性はキツい目付きで後ろの二人を見た。二人はあまりの鋭さに少し引いてしまう。

「恐がらなくていい、奴は目付きはキツいが見かけ倒しだからな」

マークが言えば女性はマークの脛を蹴飛ばした。

「ぐはっ！」

脛を押さえて蹲るマーク。それを見下す女性は冷酷な目を向ける。

「こう見えてわたし、徒手による格闘は得意なの…見かけ倒しで悪かったわね？」

そして女は顔を此方へ向ける。

「わたしはニキ、【ニキ・テイラー】このキャリーベースの副艦長をしています」

ニキは鋭い目付きを崩して笑みを向ける。

「副艦？…艦長殿は？」

マリアが聞けば、ニキは顔を横に向ける。

「ぐがー…ぐがー…」

艦長席では中年の男が酒の瓶片手に居眠りをしていた。

「職務中に…飲酒だなんて…」

マリアは少し瞳を潤ませ。エリスは我慢しきれずに鼻をつまんだ。

ニキも苦笑しながら顔を戻す。

「他のクルーを紹介するわ」

ニキはそう言ってブリッジの前にある操舵席に座る男の横に行った。

「お！なんだ新人か？二人とも可愛いねえ！特に右の金髪のー…」

「操舵に集中なさい！！」

ニキに頭を叩かれた男は軽口を止める。

「こいつは【エルンスト・イェーガー】操舵の腕は一人前だけど女の敵よ」

ニキは女の敵を強く強調した。次にニキはその横にある席へ向かう。そこには二人の男女がいた。１人は褐色の肌をと髪型が特徴的な少女と、大きなインカムをつけた少年だった。

「シェルド」

少女にシェルドと呼ばれた少年はエリスの方に振り返り、インカムを外す。

「ぬあ！」

シェルドは突然声を荒げ立ち上がる。

「まさか！…新人！？」

シェルドは素早く座席を飛び越えてエリス達の元へよじ登る。

「よっしゃあー！！ついにオレの出番！！パイロットデビュー！！通信は君にパー…」

そんなシェルドの頭に雷鳴のようなマークの拳骨がふりそそぐ。

「いってええ！！」

「パイロットになりたきゃ、シュミレーションテストで５０点以上とってみろ…話はそれからだ」

マークに言われたシェルドは落ち込むように座席にもどる。

「あー、オレは【シェルド・フォー・リー】よろしくな」

シェルドは眩しい笑顔を向けてきた。その横にいた少女はエリスを睨む。

「【レイチェル・ランサム】よ…」

レイチェルはそれきりシェルドに体を向け、シェルドの頭を気にして撫で始めた。

「そして俺が【ゼノン・ティーゲル】だ、よろしくなお嬢さん方」

寝ていた筈のゼノンは身体をだるそうにこちらに向けた。

「今日付けでこちらへ配属になりました。地球連合軍少佐、マリア・オーエンスです」

マリアは軍人らしい綺麗な敬礼を見せ姿勢を正す。しかしゼノンは頬杖をついた。

「か～お堅いねぇ、軍人のお嬢さん！まるで昔のどっかのバカだ」

ゼノンはさりげなくマークに目を向け、マークは素知らぬ振りをし

た。

「は…はあ…」

「肩が凝るだろ？リラックスしてくれよ、少佐殿」
それきりゼノンはマリアに顔を向けずにエリスを見た。

「あ…」

エリスは人見知りな訳ではない。単純に迷っていたのだ。

「この状況でもまだ迷いの色か…綺麗ないい瞳をしている」

ゼノンは真っ直ぐにエリスを見つめていた。

「エリス・クロードです…」

エリスはゼノンから目を反らして名前を絞りだした。

「マーク、少佐殿とエリスちゃんにシュミレーションテストをしてくれ」

ゼノンはそれをいいながら身体を進行方向へとむける。

「了解」

マークはエリスとマリアを連れて外へ出ていった。

「むっふふふ」

居なくなるのを確認してゼノンは笑いだす。

「エリスちゃんの成長が楽しみだな、なあ？イェーガー？」

前でイェーガーはガッツポーズ、同時にニキの回転回し蹴りが二人を制圧した。

「この！ロリコン共が！！業務しろ業務！！」

そんな事件などしりもしないエリスとマリアはＭＳドックに来ていた。

「これがドック、そしてジェネレーションフォースの最新鋭主力ＭＳ【トルネードガンダム】だ」

マークに紹介されたマリアとエリスはトルネードガンダムとよばれた兵器を見上げる。紺色を主体にオレンジ色を織り交ぜたトルネードガンダムのデザインは美しく、兵器であることを忘れてしまう。トルネードガンダムはドックに二機あった。

「たった二機だけ…？」

マリアは小さく呟いた。

「二機で十分さ、エリス」

マークに呼ばれたエリスは歩み寄り見上げる。

「後ろの機体はお前のトルネードガンダムだ…いつでも出撃出来るようにしておけ」

エリスは目を見開いて驚きを現した。

「なに…言ってるんですか…わたしは」

「コロニーでのＭＳ大会で優勝しているのだろ？ならばＭＳが初心者なわけではない」

「わたしは戦争なんて！」

「だったら今のうちに不殺の戦法でも練習しておけ」

マークの強い言葉に押されてエリスは黙ってしまう。

「なんだ、あんたらあたしのドックに何のようだい？」

そこにケイがやって来た。隣にはクレアもいる。

「シュミレーションテストだ、トルネードガンダム二号機のコクピットをシュミレーションテストモードに出来るか？」

ケイは渋い顔をして頷く。

「わかったわ…」

そして二号機の足元まで行き、端末を操り始める。その間にマーク達はデッキで二号機のコクピットまで上がり、ハッチを開く。

「オーケー！」

ケイが下から叫びマークは鋭い目付きでマリアを見た。

「必要ないとは思うがお前からだ」

「どこの部隊に監査を戦わせる部隊がいるのやら…」

マリアはため息混じりにコクピットに座り、シュミレーションが起動する。

マークはエリスを隣のコンピュータモニターの前に連れていったそこではシュミレーションでのマリアの動きが移し出されている。

「戦闘レベルは最高の5だ、12機のトルネードガンダムが相手だ異論は？」

マークがコクピットのマリアに聞いた。

「相手に不足なし、1分かからないわ」

マリアの声がコクピットから帰ってくる。

そしてシュミレーションは始まった。結果的にマリアは強かった。12機もの機体に囲まれた状態で、被弾はたったの一回、椀部についたガトリングガンを避け損ねて足の装甲に擦っただけである。

「腕が少し鈍ったんじゃないか？」

出てきたマリアにマークは冷やかすように言った。するとマリアは首を横に振る。

「トルネードガンダムの性能にわたしの反応値が追い付かなかっただけです」

「そうか、だとしたら満点だな」

マークは、コンピュータから端末にデータを打ち込み、マリアの点数を弾きだす。９８点と弾き出され、昔のゲームのようなランキングがあらわれた。一位は驚く事にクレアで１００点である、二位はマークで同じ１００点、マリアは三位だった。

「クレアはシュミレーションは完璧だ、しかし実戦では戦えない…あの性格だ、味方を撃つかもしれないからな…」

マークがそう告げるとマリアも頷く。

「確かに…」

「こらー！あたしは味方を撃つほどバカじゃないぞー！！」

下からクレアの声が響く。

「うそつけ！ラナロウを後ろから撃っただろうが！！」

マークがデッキから身を乗り出して怒鳴る。

「彼は、ガンダムマイスターに相応しくない…何ちゃって！」

「クレア・ヒースロー！！今からドック３０周！！」

クレアを怒鳴ってから戻ってくる。

「次はエリスだ、出来るか？」

エリスは不満でいっぱいだった、何故わたしなのだろうか？という不満である。

「不満だろうが、今は我々にしたがってもらう…」

マークはエリスの肩を掴んでコクピットに投げ入れた。

「きゃっ！」

「いるからには否応なしに戦ってもらういいな…」

そしてシュミレーションが始められてしまう。敵はトルネードガンダム１３機の部隊である。

「なんで私が…」

エリスは戸惑いのなかコックピットにいた。敵からビームを撃たれる。わざと当たれば必要ない人間と思われるだろう。そうすれば帰れる、エリスはそう思った。

【ドォン！】

「うわあああっ！！？」

ビームは右腕を擦った。瞬間、エリスの右腕に稲妻のような痛みが走ったのだ、エリスは右手を押さえてしまう。同時にゲームが中断されてマークの顔が現れる。

「いい忘れたが、シュミレーションモードのそのコクピットには、

直撃すると電流がながれるよう細工してある」

「そ！そんなっ…」

エリスは慌てコクピットから出ようとしたがコクピットを外から閉められてしまう。

「出して！！ここからだしてください！！」

必死に叫びハッチモニターを叩くエリスだが、非力な少女の腕ではびくともしない。

「出してほしけりゃ力を見せろ、いまの電流は挨拶代わりさ…次から直撃するたび気絶するほどの電流がながれるようにしておくからな…」

それいこうマークは回線を切ってしまう。

「そんな！マークさんっ！！マークさん！！」

エリスは必死に呼び掛けるがすぐにゲームが再開される。

「くっそおおおっ！！」

エリスは素早く座席にもどる足元のペダルを踏みつけてスラスターをふかせ、上昇することでビームを避ける。そして右手を脇に伸ばしＯＳのモニターに切り替えキーボードを取り出す。

「……何故後退している？」

外で戦闘を見ていたマークが目を細める。エリスを示すシグナルが１３機から離れていく。

「おおい！！マーク！！」

ケイの声にマークはデッキから身を乗り出す。

「どうした！ケイ！」

マークの声にケイは驚きの反応をする。

「あいつ！トルネードガンダムのＯＳを書き替えてるんだ！！スゲースピードで！！」

「ばかな！戦闘中にＯＳを切り替えるだと！？」

「マーク！」

マリアの声にマークが振り向くと、既に五機ものトルネードガンダムのシグナルが消えていた。エリスのトルネードガンダムのすばやい攻撃にあっというまに敵のトルネードガンダムが撃墜されてゆく。

「凄い…コクピットへの直撃を避けて、武器や頭部を狙ってるわ」

マリアは撃墜されたトルネードガンダムの被弾ヶ所をあげてゆく。

「たいした反応だな…よし」

マークはワイヤーガンを床に撃ち込みデッキから降りる。

「マーク？何する気？」

マークは走りながら手を振り１号機へ走ると、デッキを駆け上がりコクピットに乗り込んでハッチを閉めた。

「シュミレーション対戦だ…エリスのシステムに乱入」

１号機を起動させ設定を切り替える。

「マーク！何する気だ！？」

ケイの通信が入り、マークはニヤリと笑う。

「スーパールーキーにベテランの凄さを教えてやるのさ、何人にも１００点をやるわけにはいかんだろ？」

かくいうマークの手は悦びに震えていた。

「はあ…はあ…」

エリスはコクピットの中で今でも戦闘をしていた。現在はアステロイドの物資に隠れて敵を待ち伏せしていた。１２機のトルネードガンダムを撃墜したため、残りは１機である。

「……」

エリスは目を閉じて音に頼り精神を集中する。微かに聞こえるスラスター移動の音、エリスは目を薄く開きレーダーを確認する。大量

に映るデブリの熱源中で、小さな熱源があった。

「そこ！」

エリスはデブリの先の空間にライフルを発射した。

【ズキューン】

デブリの中から顔を出したトルネードガンダムの頭部を撃ち抜き、破壊した。

「やった…」

エリスはシートに寄りかかり脱力する。そこに通信が入る。

「あ…マリアさん？」

「エリス！マークのやつが1号機であなたの訓練に乱入しちゃったみたい！」

「え？…」

ピピピ！！コクピットの右側からロックされた音が弾けた。

「くぅ！！」

エリスは何を思うより先にペダルを踏み込んでスラスターを吹かせて上昇する。

【ズキューン！】

エリスの機体の下を、ビームの雨が降注いぎ、デブリを破壊する。

「やるじゃないか、エリス」

画面の奥から一つの閃光がこちらへ向かってくる。

「さあっ！力を見せろ！！」

「そんな！マークさん！！」

マークのトルネードガンダムはそのまま肉薄し、エリスのトルネードガンダムに体当たりを食らわせてきた。

「うあああっ！！」

トルネードガンダムは弾き飛ばされ、ダメージと認識された為にエリスの身体に電流が流れる。

「こ！…このおおお！！！！」

エリスは叫びながらビームライフルを乱射する、しかしマークはまるで流れるように動きながらライフルの弾を巧みに避け、ビームサーベルを引き抜き接近してくる。

「うく！？」

エリスは素早く身を引いて左手からビームサーベルを引き抜きマー

クのビームサーベルを押さえる。

【バシィ!!】

激しい閃光、同時にエリスの機体が側面から何かに弾かれた。マークの機体に蹴られたと気付いたのはすぐだった。

「ぎぃ!!、っあああああ!!」

流れる電流による痛みを叫ぶ事で和らげてスラスターを吹かしてマークの機体に体当たりを食らわせる。

「んなっ!…」

さすがのマークも直撃を食らい、電流の痛みに歯を食い縛る。

「くぅらえええっ!!」

エリスの叫び、トルネードガンダムの腹部がまばゆく光る。

【ズビィイイ!】

拡散ビーム砲が、バランスを崩したマークのトルネードガンダムに迫る。絶体絶命、しかしマークは笑う。

「甘いなエリス!!」

マークはビームライフルを投げ捨て、ビーム砲に当たったビームライフルが弾ける。その爆風による衝撃を利用してスラスターの威力をましたマークの機体は不自然にビームの下へと潜り込み、そして

両腕の内蔵型のガトリングガンを放つ。

【ドガガガガ！！】

放たれたガトリングガンの弾の嵐がエリスを直撃する。

「うわ！！うわあああ！！」

エリスは全身を駆け回る稲妻の痛みにのた打ち大きく仰け反った。

「止めだ！！」

マークは容赦なくエリスのコクピットにビームサーベルを突き刺し、止めを刺した。

「エリスさん！！」

マリアはエリスのコクピットをこじ開けた、エリスはシートに丸まるようにして気絶していた。

「マーク！やり過ぎよ！」

マリアはインカムでマークに怒鳴ると、マークは頬をかいた。

「すまん、余りにやるもんだから熱くなった…」

「謝る前にストレッチャー！ケイ！手伝いなさい！！」

「いわれなくたって！！」

マリアに指示された通りにマーク達は動き出す。そこへラナロウがやって来た。ストレッチャーに乗せられて運ばれるエリスとすれ違う、ラナロウには興味がないからどうでもいいことだった。ドックに入ると、中ではケイとマークがいた。

「いつの間に足をやられていたんだ?」

マークはモニターを見つめている、それはシュミレーションモードで被弾したヶ所を示すモニターだった。

「何してんすか?」

ラナロウが行けばマークはラナロウに向き直る。

「エリスとのシュミレーション対戦の結果さ…勝ったには勝ったが…手酷くやられたもんだな…」

ラナロウは驚いた。自分ですら一撃すら当てられなかったマークに攻撃を与えたエリスに。

「んな…ばかな…」

ＥＰ－３【宇宙世紀００７９】（前書き）

シュミレーショントレーニングにて、マーク・ギルダーによる手厚い歓迎を受けたエリス、しかしその間にも最初の介入が始まろうとしていた…最初は【宇宙世紀００７９】…

EP－3【宇宙世紀００７９】

「う…」

不思議な感覚に目を覚ます。見上げた目の前には再び医務室の天井である。

「…んん」

エリスは重たい身体を起こすと、目眩のような錯覚に捉われる。それが喉の渇きと空腹によるものだという事は直ぐにわかった。

「お腹減った…」

そう一人ごとを呟き、ベッドから立ち上がろうとする、そこにはマリアが目を閉じて腕を組み座ったまま眠っていた。

「マリアさん？」

呼び掛けるとマリアはパッと目を覚ました。

「あ！スミマセン…て、エリスさん…目が覚めたのですね」

「え…あ、はい」

マリアは安心しようとしてエリスの顔色を伺い手足に触れる。

「他に変わったところは有りませんか？」

エリスは首を横に振った。それをみたマリアはようやく安心の表情を浮かべて肩の力を抜いてからゆっくりと立ち上がる。そのとき…

【各員に通達、各員に通達、これより介入行動を開始いたします。これより介入行動を開始いたします…各員は衝撃に備えて下さい】

アナウンスのあと直ぐに艦が大きく揺れ動いた。

「きゃあ!!」

マリアはふらついてエリスのベッドに倒れ、そして電気が消える。

「介入…まさか…こんなに早くですか?」

マリアは呟いて天井を見上げる、エリスはというと得体の知れない不安感で胸が痛んだ。暫くしていると電気が復旧する。

「うあっ!!」

直後、エリスが頭を押さえてベッドに蹲る。

「エリスさん!?どうしたの!?エリスさん!?」

マリアが横に寄り添いエリスの顔色を伺う。

「頭が…頭が痛い…何?意志が…沢山の意志が…息遣いが……」

この現象は、エリスだけではなかった。

マークの自室―

「ぐああ！！…な…んだ…ぅ」

マークは頭を抱えてベッドの上で転がっていた。大の大人でも悲鳴を挙げるほどの激痛で、マークは立つこともできない。

―ブリッジ―

「あああ！！」

「レイチェル！！平気か！！？レイチェル！！」

ブリッジでもレイチェルが頭を抱えて倒れこみ、シェルドが血相かいて体を揺らし顔色を伺う。

「艦長！」

ニキはゼノンに目を向ける。しかしゼノンは落ち着いていた。

「この宇宙世紀には意志が多すぎるのであろう…直に良くなるから放っておけばいい」

ゼノンのやる気のない言葉に、ニキは焦りを覚える。

「しかし！」

そんな最中、ドックからも連絡が入った。

「艦長！クレアが！！クレアが！！」

ケイは軽いパニック状態で叫び、モニターにあらわれると、その背後でクレアが頭を抱えている。

「艦長が言うにはほっとけば治る見たいよ！」

ニキの言葉にケイは不安そうな顔をする。

「でもよ―」

その言葉を凄まじいアラート音が遮りシェルドは慌てレーダーに目を向ける。

「ニキ！そんな暇ねえみたいだぜ！」

イェーガーも叫び、シェルドは通信モニターの端末を操り索敵を開始する。

「センサーに感！…データ照合完了！ジオン公国軍主力戦艦！ムサイ級だとおもわれます！！」

シェルドの声にゼノンは渋い顔をし、ニキは焦った表情を浮かべる。

「く…この宙域に駐留していた部隊か！数は！？」

ニキは声を荒げ、シェルドはセンサーの感に目を向ける。

「ムサイ級2隻！ＭＳ－０６？…艦長！！ザク６機の出撃を確認しました」

シェルドのまくしたてた声にニキは顔を青くしゼノンを見る。

「まずい事になったな…」

ゼノンは何かを考えるような仕草をしていた。

「ビーム砲来ますっ！！」

そうしている間にも事態は進みシェルドが叫ぶ。

「わかってんよ！！」

イェーガーは目を熱源モニターに置きながら操舵桿を思い切り左に捻る。

【ズビィイイ！！】

ブリッジのすぐ横をビーム砲が通り抜けた。

「く！威嚇なしか！！」

ニキはゼノンに顔を向ける。

「第一戦闘配備…」

ゼノンに言われるがままにニキは動き、インカムを掴む。

【各員に通達！各員に通達！！第一種戦闘配備！繰り返す！！第一種戦闘配備！！】

ニキの声が艦内を駆け抜ける。それはマリアにも届いていた。

「…いきなり戦闘！？」

マリアは上を見上げたまま驚きを顕にした。頭痛が和らいできたエリスも顔を上げる。

再びブリッジ―。

「艦長！」

パイロット座席に座るラナロウがモニターに現れる。

「ラナロウ君…」

「もたもたすんな！敵が来てるんだぞ！！」

ラナロウに怒鳴られるゼノンだが、全く動揺を見せずにインカムを手にする。

「ケイ君！！第一ハッチ解放だ！！1号機を発進させる！！」

ゼノンの命令にドックにいたケイは端末を操りハッチを解放する。

「発進シークエンス！！トルネードガンダム！カタパルト接続！！発進タイミングをパイロットに譲渡！！」

シェルドの声に合わせてラナロウを載せたトルネードガンダムがデッキへと運ばれる。

「敵の数は…？」

ラナロウはコクピット内の最終調整をしながらモニター越しのシェルドを見た。

「ザクが６とムサイ級が２隻よ！」

シェルドの横からレイチェルが頭を押さえたまま現れた。

「レイチェル！無茶すんなよ！」

シェルドの声など無視したレイチェルは隣の座席に腰掛けザクのデータをラナロウに転送する。

「…ふん」

ザクのデータを受け取り、眺めたラナロウは鼻で笑う。

「雑魚じゃねえか…」

そうしてラナロウは通信を切り、それと同時にゼノンはニキに顔を向ける。

「ラナロウ君出撃後！艦を反転させ迎撃にでる！！よいな！」

「「「了解！！」」」

一通り調整を終えたラナロウはグローブの握りを確認し、グリップを握る。そして…

「ラナロウ・シェイド！トルネードガンダム！！行くぜ！！」

【ドオッ！！】

カタパルトがキャリーベースの中からトルネードガンダムを打ち出した。打ち出されたラナロウはすぐ様反転し、背後に迫っていた部隊に向かう。

『なんだ！？』

ラナロウのコクピットにザクからの無線が入る。

『見たことのない機体だ！油断するな！！』

『連邦め！いつの間にこのような兵器を！！来るぞ！！』

ラナロウはあまりの敵のザクの可笑しさに笑いを堪える。

「おら！おせえんだよっ！！！」

ラナロウのトルネードガンダムより放たれたビームライフルの光が、真っ先に最後尾のザクのコクピットを貫く。

『うわあああ！！』

貫かれたザクパイロットの断末魔と共にザクが光の玉となった。

『やられた！！なんだあの武器は！？』

「わかんねえよな！！原始人にはよおおおっ！！！」

ラナロウは立て続けにライフルを発射し、新たに2機のザクを光に変える。

「後三機！！」

ラナロウのトルネードガンダムの背後からミサイルが迫り、ビーム砲の弾幕が形成される。

「ちい！ムサイか！」

ラナロウは的確に敵の攻撃を避けて間合いを計る。そうしている間に2機のザクが接近してきた。

『抑える！！』

「ならこれならどーだい！！」

ラナロウのトルネードガンダムの腹部が煌めいた。

『な！』

この時の彼らはしらなかった。拡散ビーム砲を。

【ズビィイイ！！】

『うわあああ！！』

接近していた2機のザクが消滅し、残ったのは1機だけだった。

『なんだこれは！！？化け物だ！！強すぎる！！』

「逃がさねえよ！！そらあああ！！」

ラナロウのトルネードガンダムは一気にザクとの距離を詰め、ビームサーベルで頭からから竹割りにして破壊した。

「あとはムサイ！！」

ラナロウの肉眼に2隻のムサイが移る。

「メガ粒子砲！！撃てー！！！」

そこにキャリーベースからの攻撃が開始される。キャリーベースの

攻撃はムサイの横に反れたしかしその瞬間回避行動に専念したムサイからビームによる弾幕が無くなってしまう。

「うおおおおっ！！！」

ペダルを強く踏み込んでスラスターを全快に開き、一気にムサイとの距離を詰めたラナロウは。背後を大量の大型ミサイルが追い掛けてくる、しかしラナロウは気にもせず、そのままのスピードでムサイの下に潜り込んだ。

「なに！？うわあああ！！」

一隻のムサイは自らのミサイルの直撃により大破し大爆発を起こす。

「後ひとーつ！！」

ラナロウは一気に隣のムサイに接近する。

「うて！！撃墜しろっ！！！」

ムサイのビーム砲の火線がラナロウのトルネードガンダムへと迫る。しかしトルネードガンダムは素早くムサイの下に滑り込む。

「不便だよなあ…下に武装のねえ艦はよお！！」

ムサイのブリッジを下方へ潜り込んだラナロウは、腹部から拡散ビーム砲を至近距離で発射し、ブリッジを破壊しムサイの機能を奪った。

「こちらラナロウ、ジオン公国の部隊の殲滅を確認」

ラナロウは辺りを見回し生存反応を確認する。

「ご苦労だったラナロウ君」

ゼノンからの無線が入り、ラナロウはグローブの握りを確認する。

「別に、雑魚相手だしな…」

生体反応を示すアラートがコクピット内に鳴り響き、ラナロウは画面に目を向ける。画面には白旗を振るジオンの宇宙服がいた。

「おやおや」

ラナロウは残忍な笑みを浮かべ、回線を全回線に切り替えた。

「ジオン公国軍の兵士たちに告げる。俺は、連邦地球軍のラナロウ・シェイド、君たちにお願いがある。お願いを聞いてくれるのであれば、貴君らを殺したりはしない」

「ラナロウ君!?何を!?」

突然のラナロウの行動に困惑したニキが叫ぶ、しかしラナロウは画面越しで口に人差し指を立てる。

「お願いというのは、我が艦における物資の供給だ、そうすれば俺は君たちを見逃そう」

その浮かれた声色は医務室のエリス達にも聞こえていた。

「彼は何を言っているの？」

そこにマークがやってくる。慌てた様子ではあるがその顔は頭痛による苦痛で歪んでいた。

「マーク！」

マリアはそんなマークに駆け寄り肩を貸す。

「俺はいい…ラナロウを…あいつを止めろ！…」

マークは何かを知っている口振りで叫んだ。大分頭痛が治まってきたエリスは立ち上がるとマークの側に寄り添う。

「どういう事？」

マリアは状況を確認しようと聞き入り、マークは目を逸らした。

「…奴は物資を奪い、脱出ポットに乗った彼らを殺害するつもりさ」

マークの言葉にマリアは蒼白となって手を離してしまい。マークは床に膝砕けになって座り込む。

「…そっ…それはっ…」

俄かに信じがたいマークの言葉にマリアは動揺を示した。

「それは…海賊行為よ!!?そんな事を…」

「あいつは傭兵だ…傭兵は機密主義な連中が自分を知った人間達を生かしておくと思うのか!?」

マリアの言葉をマークは怒鳴りたててかき消し、次にエリスに首を向ける。

「良く聞け……無闇な殺生はウォーズブレイクを引き起こし、あらたな黒歴史を生む事になる…」

「ウォーズ…ブレイク?…」

「ジェネレーションフォースの役割は、黒歴史内に我々の記憶を残し、あっては成らない物を始末しなければならないんだ…確かに人を殺す内容でもある」

マークは額についた冷や汗を拭う。

「だが…黒歴史だって歴史だ…無闇にその時代の人間を殺せば、後の歴史に存在しなかった事になってしまうんだ…それがウォーズブレイク…歴史のズレさ…」

「ウォーズブレイクしたら…どうなるんですか?」

「月光蝶は我らにペナルティをかす、一説によると月光蝶により選ばれた兵士が現れ試練を与えると言われている。」

エリスはすっかり頭痛が無くなっていた。それよりも走りだしていた。真っ直ぐにドックへ。

「エリス！なにやってんだ！！」

ケイに呼び止められる。が…エリスは素早くデッキに上がりコクピットに乗り込んで起動させた。

「2号機でます！！」

「なんだとぉ？出るっつったって」

「早くハッチを開けてください！！」

エリスはコクピットから叫び、ビームライフルをとると前に向かう。

「唐突だなぁおい…」

ケイは、頭をかいて唖然としていた。

「ケイ君」

そこにゼノンからの通信と同時にモニターに顔が現れる。

「艦長！」

ケイは思わず帽子を脱いでしまう。

「ブリッジで2号機の起動を確認した、どうかしたかのかね？」

するとエリスが回線に割り込んでくる。

「いまラナロウさんがあの人たちを討ったら、ウォーズブレイクしちゃうかも知れないんですよね！？」

エリスの叫びにゼノンの顔色が変わる。

「ウォーズブレイク？」

ニキもゼノンに顔を向ける。ゼノンは小さく頷いた。

「その通りだ…」

そして、ゼノンは重い口を開いた。

「しかしエリス君、君の正義感は大したものだ…だが君はそのＭＳに乗って外へ出たとたん、正真正銘、ジェネレーションフォースに配属されることとなる…良いのかな？」

その言葉にエリスは一瞬思考が止まる。そうだった…自分は帰りたかったのだ。しかし自分は今ここにいる。そして覚悟を決めるのも早かった。

「行きますッ！」

エリスの決意にゼノンは頷いた。

「後部ハッチから出ろ！ラナロウ君を止めてくれ！抵抗した場合は頭部を壊してくれて構わん！」

ゼノンの命令にエリスは頷き後部ハッチへ向かう。

「頭部破壊だあ！？おいおい！メカニックの仕事を増やすんじゃねえ！！」

「艦長命令だ！」

「マジかよ…」

乗り気しないケイはとぼとぼ端末に向かうしかし端末のまえには…。

「ハッチ開放～！！」

クレアが元気良く端末を叩いていた。

「ちょ！！クレア！！？あたしまで宇宙へ放り出す気かー！！」

ケイは慌て端末のある部屋に飛び込み、同時に後部のハッチが解放される。

「ばかやろう！！殺す気かてめー！！！」

ケイはクレアに走りその頭に拳骨を叩き落とした。

「エリス・クロード！トルネードガンダム2号機！発進します！！」

エリスは開けられたハッチから宇宙へと出た。

「く…機体が重いッ…」

重力落下による身体の重みを感じたエリスは、シュミレーションと現実とのギャップに戸惑いをながらもペダルを踏み込み、スラスターを吹かせた。

「これで全部かな?」

ラナロウの前には、コンテナ2つ分の物資と2機のザク?を滷獲していた。ムサイの下に取り付けられたコムサイという脱出用シャトルもスタンバイされておりなかには兵士が見える。

「そうか…じゃあ…」

ラナロウはジオン兵士たちが乗る脱出コムサイを撃とうとビームライフルを構えた。

「やめてーー!!」

鋭い少女の声が、ラナロウの耳を貫き、それがラナロウの気を一瞬逸らした。

【ドォン!!】

エリスの乗る2号機が1号機に体当たりし、1号機は空間に投げ出される。

「なにしやがる!!てめえ!!」

「早く逃げて下さい！！」

ラナロウを無視したエリスは、声いっぱいに張り上げて叫び。エリスの声にジオンの兵士たちは慌て、コムサイにのりこみ発進してしまう。

「てめえ！！裏切りやがったのか！！」

ラナロウは怒りでビームライフルをエリスに向ける。

「わたしは裏切ってなんていません！あなたの行為は…」

【ズギュン】

ラナロウは容赦なくビームライフルを発射し、エリスは機体を横にずらしてビームをすれすれに回避する事に成功したエリスは戦慄を覚えた。

「な！…なにを！？」

「裏切り者が！オレに説教たれんじゃねー！！！！」

ラナロウは怒りで我を忘れていた。ビームライフルふを撃ちまくりエリスを攻撃する。

「2号機にションベン臭え臭いがついただろ！？そのコクピットはビームライフルで除菌してやるよ！！てめえごとな！！」

支離滅裂な事をいいながらビームライフルを撃ちまくりガトリングガンを乱射する。

「二人の戦闘！終わりません！！」

シェルドが叫びに、ニキはため息を漏らした。

「戦争は遊びではないというのに…エリス！さっさと制圧しなさい！」

ニキの命令を受けたエリスは一気に接近する。

「な！！」

驚くラナロウだがエリスは気にしない。

「この！！わからず屋ーー！！」

エリスのトルネードガンダムの回転回し蹴りがラナロウのコクピットを叩いてぶっ飛ばす。

「…ニキさん！」

その時、ブリッジの通信副座席にいたレイチェルがレーダーを見て叫んだ。

「レーダーに感？まさか…ここにはもう一隻艦がいたというの？…」

呼ばれてニキはレーダーを確認に向かう。

「…まさか……」

ゼノンが声を漏らしてニキ達は一斉に注目する。そしてこの宙域を思い出した。

「しまった！！」

ゼノンは慌てるように立ち上がりレーダーに目を向ける。

「二人に高速で接近する気鋭が有ります！速い…」

シェルドの声にゼノンは顔面蒼白となった。

「それは【赤い彗星】だ！！二人を下がらせろ！！やられるぞ！！」

ゼノンの声にブリッジクルーは一斉に騒めく。

「こいつ！！舐めやがって！！」

ブリッジの騒ぎ等、知る由もないラナロウはエリスにビームライフルを向ける。

【ピピピ】

同時に叫ぶ警報音にエリスは素早く反応した。

「ラナロウさん！！」

叫ぶが間に合わない。上から飛んできたのは炎の玉のようだった。

【ドォン！！】

爆発と同時にラナロウのトルネードガンダムの右腕が大破する。

「ぐああ！！」

衝撃に声を挙げるラナロウ、エリスはすぐ様接近して1号機を掴み体勢を崩させないように引き寄せた。

「大丈夫ですか！？ラナロウさん！！」

「てめえエリス！やりやがったな！！よくも！！」

そこへニキからの通信が入る。

「二人とも落ち着きなさい！！新手よ！！」

「何いっ！？」

ラナロウとエリスは同時に上を見た。そこには赤いザクが1機、バズーカを片手に見下ろしている。

「白い奴の次は青い奴か…わたしは運がいい…」

赤いザクのコクピットの中で男はそう呟く。…そして

「見せてもらおうか…青い奴の性能とやらを！！」

真っ直ぐに突っ込んできた、男の名前は【シャア・アズナブル】ジオンの【赤い彗星】とよばれるエースパイロットとの遭遇、エリスの人生で最初のピンチの訪れであった。

ＥＰ－４【赤い彗星】（前書き）

宇宙世紀００７９へと介入したエリス達は、ジオン公国軍の部隊と遭遇し戦闘へと突入する。原因不明の頭痛に悩まされたクルー達は絶体絶命の危機に陥る。しかしジェネレーションフォースパイロット。ラナロウ・シェイドの活躍で事無くを得たと思われた…が…

ＥＰ－４【赤い彗星】

赤いザクは真っ直ぐブーストして突っ込んできた。

「くっ！」

エリスはラナロウの機体をブーストで押し出し、赤いザクを正面からぶつかり合う。

【ドォン！】

「が……かはっ！！」

凄まじい衝撃がエリスの全身を打ち付け、エリスは肺から息を吐き出し、そのまま機体ごと吹き飛ばされる。

「エリスーー！！」

ラナロウは叫び、残った左手から格納されたガトリングガンを取出し赤いザクに撃ちまくる。

「ラナロウ君気を付けて！！それはジオンの【赤い彗星】！！エースパイロットよ！！」

ニキの切羽詰まった声がコクピットに響く。

「見りゃわかるよ！エリス！！起きろエリス！！」

しかしエリスからの返事はない。その間にもバズーカの弾をラナロ

ウの機体に放つザク。

「んな攻撃！！」

ラナロウは腹部の拡散ビーム砲を撃ちバズーカの弾を撃墜する。

「拡散するビームだと？…ねえい！」

シャアのザクは一気に下降してビーム火線を避けてラナロウに向かう。

「ち…エリス！！とっとと起きろ！！やられちまうぞ！！」

「青い奴の片方は死んだか…ならば！」

一気に接近しようとするザクにラナロウは左手椀部ガトリングガンを撃ちまくり弾幕を展開する。

「椀部にガトリングガンを搭載しているのか…白い奴とは違うな」

ザクは突然足のスラスターを使い高度を揺らめかせ、火線の下をくぐり抜けラナロウの機体に迫る。

「なめんなあああ！！」

ラナロウの機体は潜り抜けてきたザクへと蹴りを放つがそれも避けられ、ザクはヒートホークを引き抜いて振り上げる。

「んなっ！！」

ラナロウの顔が驚きに見開かれる。

「終わりだ！！青い奴！！」

振り下ろそうとするヒートホーク、しかし…

【ピピピ！！】

弾けるような音を鳴らすアラート音、シャアは目を疑った。

「何！？」

そこには猛スピードで脱出シャトルが突っ込んできていた。

「ええい！！」

シャアはラナロウに振り下ろそうとしていたヒートホークをシャトルに振るいシャトルを破壊する。

「このやろおおっ！！」

ラナロウは再びガトリングガンを撃ちまくれば、シャアのザクは距離を取り当たらない。

『ラナロウ！距離を取り時間を稼げ！！』

ラナロウの耳にマークの声が響く。見れば二人のパイロットスーツ

がザクへ向かっていた。

少し前―

「赤い彗星と遭遇しただと!!?」

マークはモニターに映されたゼノンに向かって叫びマリアに抑えられる。

「今はラナロウ君が交戦してる」

「ならなんで援護しない!二人はまだ宇宙での戦闘はシュミレーションしかこなしてないんだぞ!?勝てるわけがない!!」

「マーク!!」

マリアはマークを黙らせゼノンを見た。ゼノンは首を横に振る。

「相手は赤い彗星だ、こんな戦艦などではすぐに撃沈させられてしまうだろう艦は動けん」

「なら!二人を見捨てろというのか!!?ふざけるな!!」

マークは柄にもなく怒鳴りたててモニターを叩く。

「艦長!あきらめるにゃ速いぜ!!」

そこにケイが割り込む。

「どう言うことだ?ケイ」

マークは椅子に座り聞く姿勢になる。

「簡単さ、ラナロウの破壊したムサイの近くには物資とザクが2機漂ってる…」

マークとマリアは顔を見合わせる。

「…しかし、どうやってそこまでいくの？いま二人と赤い彗星は交戦してるんでしょ？」

マリアの不安気な表情をみたケイは不気味に笑った。

「脱出用のシャトルは用意した…後は当たって砕けろ？オーバー？」

モニターに写し出されたシャトル、マークはそれを見るなり立ち上がる。

「マーク！？」

動揺したマリアは立ち上がりマークを止めようとする。しかしマークは何も言わない。

「わかった…付き合いますよ」

マリアは意図を汲み取り溜め息を吐き出した。

「よし！行くぞ！」

場面は戻り―

「時間稼ぎったってよ！！オイコラ！！エリスーー！！」

ラナロウはガトリングガンをばらまき、高機動で動き回る赤い彗星のザクを追い掛けた。

「済まないなマリア、特使の君を戦わせる事になるなんて…」

マークはザクのコクピットでパラメーターを調整しながら呟いた。

「もう慣れましたよ、軍の時からあなたはいつもそうでしたから…」

マリアは既に調整を済ませ起動のタイミングを伺っていた。

「起動と同時にバーニア全開」

「タイミングは任せます」

マリアはヘルメットの無線を聞きながら目を閉じ、集中する。

「早くしてくれ！もう…」

そんなラナロウの足をシャアのザクが放ったバズーカが吹き飛ばす。

「うわあああっ！！」

ラナロウの機体が大きく揺れて飛んでゆく。その時、シャアは戦いながら考えていた。

「…先程の無人のシャトルは一体なんだった…」

シャアは自分の経験から答えを探す。

「わたしの機体にダメージを与え、鈍らせるための攻撃？」

最初に頭に浮かんできた作戦を口に出す。

「否―違うな、それならばシャトルに爆薬を積んでいる筈だ…」

次に目の前を飛びかう半壊状態のトルネードガンダムを見る。

「あの機体を逃がす為のブラフとは考えられん…」

そしてそのモニターの端にザクが映る。

「まさかっ…！？」

「いまだ！！…」

同時に2機のザクが起動し、ランドセルのバーニアを全開に真っ直ぐ進む。

「ち！！やはりか！！」

シャアはバズーカを2機に放った。轟音とともに迫る火の玉。

「マリア！フォーメーション！コークスクリュー！！」

「了解！」

マリアとマークのザクは背を合わせクルクルとローリングをし始めるとそのままバズーカの弾を弾いて避け、弾かれたバズーカは空間で爆発しその威力で2機のスピードが増す。

「バカな!?バズーカの弾を弾くだとっ!?」

驚きに目を見開くシャア、その間にもマリアとマークのザクは回転しながらシャアへ迫る。

「背中を借りるぞマリア!!」

「了解どうぞ!!」

息のあった二人のザクは少し離れ、マリアのザクが減速し、マークのザクはマリアのバーニア、文字通り背中を蹴り、離れる。

「囲む気か!?やらせるかっ!」

シャアの視線はマークに向かう。

「マリア!!」

同時にマリアのザクがマシンガンを放つ。

「何!?…」

不意を突かれたシャアだったが、両足のバーニアを使い体を回すようにしてマシンガンを右足に擦らせて避け、バズーカをマリアのザクに向ける。

「こっちだ！」

そこでマークのザクが背後から体当たりをぶつける。

【ドォン】

激しい衝撃にシャアのザクが吹き飛びコクピットのシャアに凄まじい衝撃を浴びせる。

「味な真似をッ！」

シャアのザクは判定せずに前にいるマリアに向かって進み、ヒートホークを振り抜いた。

「マリア！！」

完全に不意をつかれたマークは出遅れる。

「バカに…するなあああ！！」

マリアのザクはマシンガンを捨てて正面からシャアのザクに迎え撃つ。

「マリア止せ！！やめろおお！！！」

マークの声を耳にするも、マリアのザクはシャアのザクに組み付いた。

「ええい！！何の真似だ！？」

動揺を見せるシャアだったが、直ぐに組み付いたザクを剥がそうとする。しかしザクは離れずバーニアを全開に開く。

「バーニアを開いた！？やつめ…道連れにするきか！？そうはいかん！！」

エリスは、うっすらと目を覚ました。急にザワザワとした胸騒ぎがしたからだ、モニターを見る。赤いザクと緑のザクが組み付いて光っている。それがバーニアの光である事はすぐにわかった。何故？エリスは虚ろな意識の中で思う。しかし頭が痛い。見れば重力で自分の血が舞っていた。頭を打ったのだ…そうエリスは思った。

『起きなさい…エリス』

暖かい女の声が耳に響いた。

「だれ？」

エリスの視界がぼやけ、そこに女が現れる。俄かに信じがたい怪現象に、エリスは目を凝らすが、女は幻ではなかった、モニターに写し出されているのだ。

『わたしは…【アプロ……】…ジェネレーション……の端末…』

ぼやけた画面の女の声は、エリスの耳には聞こえなかった。しかし…はっきり聞こえた言葉がある。

【あなたに種を授けましょう】

「マリアーーー！！！」

マークの声でエリスは現実に突き戻される。同時に緑のザクが赤いザクに斧で両断され、光のたまになった。

「このやろおおっ！！」

マークの声と共にもう1機のザクが向かって行く。

「まりあ…さんが？」

エリスの胸を凄まじい痛みとマークの憤りの騒つきが駆け巡る。そして、マリアの顔が走馬灯のように流れ、エリスの瞳から涙が溢れた。

「おおおお！！！」

怒りに身を任せたマークはヒートホークを振り抜きシャアのザクに斬り掛かる。しかしシャアのザクは素早く身を横へ反らして後ろに回る。

「しまった！！」

マークにはスローに映る、赤いザクがマシンガンをホルダーから外して構える姿が。

「うわあああっ！！！」

途端、動かなかったエリスのトルネードガンダムが動き、バーニアを全開にして一気にシャアのザクに迫った。

「なにっ!?」

完全に不意を突かれたシャアは見事にエリスの体当たりを受ける。

「青い奴が生き返っただと…ぐ!!ええい!!」

衝撃緩和のエアバックが顔に直撃するもはねのけ、エリスを引き剥がそうとする。

「お前なんか!お前なんか!!!お前なんかあああ!!」

その瞬間、エリスの頭の中で種が弾けた。

エリスのトルネードガンダムは自らシャアのザクを凪ぎ払い、凪ぎ払ったザクのバックパックを掴んで振り向かせ、手にしていたマシンガンを掴んで奪って投げ捨て、ヒートホークを抜くしのザクの手首を掴んでそのまま握り潰し、そしてシャアのザクの頭に拳を打ち込み掴んで排気官を引き契る。

「こいつ!急に動きが…!!」

シャアは苦し紛れにトルネードガンダムから離れようとすれば、今度はコクピットめがけて蹴りがとんできて直撃する。

「うわああっ!…ば…化け物か!?」

シャアのザクは解放されて空間を飛んでいき、それから反転すると、一目散に逃げていった。

「逃がすかあああ！！」

エリスはビームライフルを引き抜き、シャアの逃げた方向に撃ちまくった。

「エリス！！」

そのモニターにマリアが映る。

「え？」

唖然とするエリス、モニター越しにマリアは健在を見せていた。

「なん…で？」

「ザクを捨てて脱出したのさ…こいつ」

モニターのマリアの隣でラナロウが頭に腕を組んで寝ていた。

「バカかお前！！」

マークが無線に割り込み、怒鳴った。

「それよりエリス！！あの赤い彗星をボコボコにしちゃうなんて凄いわよ！！」

マリアは興奮した様子で、モニターに顔を寄せる。

「え？…いえ、もう無我夢中で…」

「諸君話はそれくらいで良いかな？」

そこにゼノンの通信が入る。

「赤い彗星は去ったにしろ、まだ付近にジオンや連邦がいるかもしれん…速やかに機体と物資を回収し…この場を離脱する！いいな！」

「「了解」」

こうしてエリスの人生最初の危機は去った、しかしこの危機はあくまで最初に過ぎないのだった…。

EP－5【サイド7】（前書き）

エリスの活躍によりシャアを撃退する事に成功したジェネレーションフォースは、ＲＸ７８ガンダムの最終調整が行われていた旧コロニー【サイド7】を目指した。

EP－5【サイド7】

赤い彗星との遭遇から2日。エリス達ジェネレーションフォースは、サイド7コロニーの跡地に向かう道中にいた。

サイド7とは、この時代における技術の結集した機体【ＲＸ－７８－２＝ガンダム】が最終調整のために搬入されたコロニーであった。が、その後にジオン軍の襲撃により破壊され、宇宙に漂うゴミとなった。

「何故、そんな場所に行くんですか？」

エリスは説明の最中ニキに対して質問した。エリス達パイロットは、今後の目的を聞くべく。ブリッジに集められていた。

「オレも疑問だな、もうガンダムはないんだろ？」

隣で気だるそうに椅子に座っていたラナロウも疑問を投げ掛けた。

「ラナロウさん！また海賊みたいな…」

「あー！うるせえうるせえ！もうしねえよ！しねえ！」

エリスに咎められたラナロウはうんざりした様子で手を振った。ラナロウはエリスを仲間として認めたらしく2日前のような刺はもうなかった。

「その解答は間違っているとしたらどうする？」

ニキは意味ありげな笑みを漏らして索敵モニターとなるデッキに脇に抱えたファイルを置いた。

「このコロニーにはもう1機、ガンダムがいた…しかしジオンの兵士の自爆攻撃によりコロニーの外へ投げ出された、ガンダムタイプの装甲だ…ザクの爆発程度ではダメージにならない。」

「じゃあ俺達はそのガンダムを回収しに?」

マークは鋭い目付きのままニキを睨んだ。ニキは自信のある表情で頷いた。

「モニターを見て」

ニキは指し棒を手にして大型モニターの横に立つ。

「これが、我々が回収するガンダムタイプだ」

モニターに写し出されたガンダムは、黒い装甲に中距離戦を模したような設計が為されていた。その証拠に、右肩にはキャノンが取り付けられている。

「このガンダムは、RX78－1、ガンダム試作実験初号機の改良型、ヘビーガンダムという」

ニキはガンダムの要所に指し棒で差しながら説明を続ける。

「なんか…ガンキャノンみたいですね…弱そうだわ」

マリアは小さく愚痴を漏らした。

「だが、いま俺達にはザクとトルネードガンダム1機しかない。現状はザクよりも優秀なのは確かだな」

マークは的確に現状を覚りニキに肯定の姿勢を見せる。

「マーク、我々がこの機体を回収するのは戦力の強化が目的ではないわ?、この機体をジオンにも連邦にも渡さないようにするためよ」

ニキはそうファイルを開く。

「黒歴史のデータによれば、この機体は地球連邦軍により回収されて強化され、フルアーマーガンダムとして戦地に投入されて多大なる戦果を挙げるわ、それを防ぐため、ヘビーガンダムは回収、又は破壊する」

ニキは長い台詞をいい終えた役者のように息を落ち着かせる。

「既に地球連邦軍のサラミス級戦艦が、ヘビーガンダムを回収に向かっているわ…戦闘にならなければ良いんだけど」

「そりゃ無理だろ!」

操舵桿を握るイェーガーはその場で声を挙げ。全員がそちらに集中する。

「サラミス級の索敵能力は甘く見れない…それにこののろまちゃんは（キャリーベース）は目立つからな」

イェーガーの意見にマークも頷く。

「先撃ちで叩くしかないか…」

マークの言葉にエリスは前に出る。

「そんな！ウォーズブレイクするかも知れないんですよ！？」

「するだろうな」

マークはエリスの言葉を真っ二つに切り捨てた。

「え…？」

エリスは唖然と口を開けた。しかしマークは表情一つ変えない。

「只でさえ後に暴れるヘビーガンダムを奪うんだ、回収に来た奴らだってフルアーマーガンダムの開発に携わる奴らなはずだ、フルアーマーガンダムをこの歴史から消そうとしてるんだぞ？間違いなくペナルティとなる…」

マークの言葉に今まで沈黙していたゼノンも口を開く。

「ある程度は敢えてウォーズブレイクさせて月光蝶の刺客を仕留めるのも我々の仕事でもある」

ゼノンは重みある言葉にエリスは脱力して椅子に座った。

「そんな…」

「おめえは気にする必要ねえよ」

ラナロウは独り言のように呟いた。

「討つのはオレがやる、だからお前は気にすんな…」

「……」

エリスは黙り込み、重苦しい空気が流れる。

「取り敢えず、食事にしましょう」

ニキは時計を見てからゼノンに目配せすれば、ゼノンは頭をかきながら頷き、その場は解散した。

「エリスさん、平気？」

マリアが隣にやって来た。エリスはいまだに困惑の表情を浮かべている。

「…はい」

その声に力は無い。何処か上の空だった。

「行くぞエリス！」

そんなエリスをラナロウが無理矢理立たせて押し出すように食堂へ

向かった。

それから数時間、特に何もない時間が過ぎた。エリスは、トルネードガンダムのコクピットの中で、趣味の読書をしながら、ふとこんな時間が何時までも続けばいいと思っていた。

そう思うもつかの間である。

【各員に通達、各員に通達…本艦はこれより、サイド7宙域へ入る、本艦はこれよりサイド7宙域に入る！パイロットはドックにてパイロットスーツ着用し待機せよ…繰り返す】

「もう着てるよ…」

エリスはニキの通達を危機ながら座席に持ち込んだ栄養剤を口に含む。

「エリス」

そこへマークがやってきた。

「は！は！！いっ！！」

エリスは慌て立ち上がり狭いコクピットの天井に頭をぶつけてしまう。

「なんだ？エロ本でも読んでたのか？」

「わたしは女ですっ！！」

エリスは一気に怒鳴りたてる。するとマークは腕を組み唖然とする。

「そうか？女だろうが年頃なら、エロ本の１冊や２冊くらい…」

「持ってません！！だ！！だだだ！大体わたしは１５ですよ！？買えるわけが！！…大体！なんでわたしがそんないかがわしい本を…」

ムキになったエリスはまくし立てながらも想像してしまい赤くなる。

「いいね～思春期」

「茶化さないでください！！」

エリスはあくまでも食らい付くも、マークは軽くあしらう。

「マリアなんて軍学校の頃は大量のエロ本を持ってたぞ？男同士の…ＢＬもの？」

瞬間エリスの表情が固まる。そして一気に真っ赤になった。

「…もも！持ってませんよ！？持ってませんからね！！」

エリスはリンゴのように真っ赤になりながら凄まじい反応でマークを殴りつけた。

「はっはっは！痒いかゆっ…」

余裕の笑みを浮かべていたマークの側頭部にバールが直撃し、重量の力にまかせてマークが飛んでゆく。

「なにいってんだくぉらあ！！」

下からマリアの雄叫びのような声が聞こえてきた。

「冗談だよ…」

空間で反転してコクピットに戻ってくるなりマークは急に顔つきが変わる。

「エリス」

「…はい」

エリスは落ち着いてパイロットシートに座りマークを見上げる。

「今回、戦闘になったら…おまえはガンダムの回収を優先しろ」

マークの言葉にエリスは呆然とする。

「え…？でもっ」

エリスの言葉をマークは口に指を当てて防ぐと、マークは顔を左右に向けた。

「今回は艦隊との戦闘になる。」

「わかってます！だったら数が多い方が…」

エリスは反論しながら気付き言葉を止める。

「昔のサラミス級は装甲なんて皆無だ、トルネードガンダムのビームライフルなんて当てたら吹き飛ぶのは砲座だけじゃ済まない…殺したくないんだろ?」

エリスは無表情のまま頷いた。マークはエリスが納得するのを確認すると表情を崩した。

「回収にはラナロウも付けるから心配するな」

更にエリスは疑問を浮かべた。

「何で…」

するとマークは不適に笑う。

「ここは数日前まで人が生活してたんだぞ?当然中には逃げ遅れた奴らもいるだろう…そしたらどうだ?報われない彼らの魂がいまも」

「ひやあああああっ!!」

エリスはその手の話は滅法嫌いだった顔を恐怖に引きつらせてコクピットから出たがる。

「じょ!冗談冗談!!落ち着け!!」

マークは恐怖で涙目になるエリスを抑えてコクピットに押し込んだ。

「夜トイレに行けなくなるじゃないですか！？」

エリスの悲痛な叫びにマークは頬をかく。

「携帯用のオムツあったかな」

「ここからでていけー！！！」

エリスはマークに体当たりを食らわせ一緒に外へ出る。

「何やってんだ？…」

パイロットスーツに着替えたラナロウは渋い表情で二人を見た。

「ラナロウさーん！」

ラナロウを見た途端に抱き付くエリス。

「んな！なにしやがるテメェ！！はなしやがれ！！」

ラナロウはくっ付くエリスを引き剥がそうとするがエリスはくっついて離れず、面倒になったラナロウはそのままマークを睨む。

「いやな？亡霊が出るかもってな？」

するとラナロウも口端を引きつらせる。

「ちょっ…まじっすか…」

真面目に反応するラナロウにマークはしまったと言う顔をする。

「まて！お前そういうの平気なはずじゃ？」

「駄目に決まってんじゃねえですか！！聞いてねえぞ！！」

ラナロウは真剣にビビった様子で怒鳴った。

「お前そういうキャラしてねえだろ！！外見的に」

「外見で考えんなよ外見で！！」

ラナロウはエリスに顔を向ける。

「エリス！武器倉庫行くぞ！！拳銃だけじゃだめだ！バズーカ持ってこようぜ！」

完全にビビったラナロウは真面目に叫びエリスも肯定する。

「わたしも持って行きます！！」

「ああ！二人で持ってこう！！ガンダムなんか木っ端微塵にしてやるぜ！！」

「オレが悪かったー！！」

マークの声に二人は我に帰り、そこにマリアがやってくる。

「何してるんですか？」

マリアは左右に首を振り双方を見つめ首を傾げた。

「それが…」

エリスはマリアに事の次第を伝えた。

「亡霊なんかいるわけないじゃないですか…馬鹿ね」

マリアは穏やかに笑い飛ばす。

「でも、亡霊はいなくても仏様が沢山あるのは確かね…そんな所に女の子を1人で行かせるのは確かに可哀想ですからね」

マリアはそう言いながら、ラナロウに顔を向ける。

「エリスさんを確りよろしくね？」

ラナロウは小さく頷く。

「最善は尽くす」

「あと…」

マリアはラナロウの足元にめを送る。

「バズーカはいらないからね？」

ラナロウの足元にはいつの間にかバズーカがあった。

「…うす」

【ブリッジよりトルネードガンダム、ブリッジよりトルネードガンダム…発進準備を】

そこにニキの声のアナウンスが鳴り二人は顔を見合わせコクピットに入る。

「おい」

ラナロウは不満げな声を漏らす。

「なんでオレが操縦じゃねえんだ？」

ラナロウの言葉にエリスはそっぽむく。

「不満なら1号機にどうぞ？」

1号機は現在脚部を交換されており、足が無い。

「くぬぬ！！」

ラナロウは我慢して後部の副座席に座った。そこにニキからモニター通信が入る。

「エリス？聞こえてる？」

ニキは怪訝な顔で通信モニターへと映る。

「は！はい、大丈夫です」

ラナロウは後ろの座席から顔を出す。

「あれ？なんでラナロウ君までいるの？」

ラナロウを見た瞬間ニキは驚きを浮かべた。

「隊長からの命令っす」

ラナロウが言えば、モニター横からクレアの顔が現れる。

「ダメダメラナロウ！なんで後部座席なのさ！」

クレアは見るなりそんな事を言ってきた。

「は？」

ラナロウもエリスも顔を見合わせた。

「普通はラナロウ君が操縦でしょ！？」

その言葉にエリスは口を開けて唖然としラナロウは嬉しいのか立ち上がる。

「だよなー！おら！エリスそこどけ！」

しかし、クレアはまだとまらない。

「で～エリスはその膝の上にこうやって座って～」

クレアはゼノンの膝の上に座る。

「エリスはオレが守る！なんちゃって～！」

「わりっ…エリス、後部座席でいいや」

「はい、わたしもそれがいいと思います」

二人は息ピッタリに無線を切り、後部ハッチに向かった。同時にシェルドの顔が映し出される。

「後部ハッチを開くぜ」

「お願いします」

そして鈍い音と共にドックの後ろに付けられた後部ハッチが開き、デブリの漂う宇宙が広がった。

「トルネードガンダム、エリス・クロード、ラナロウ・シェイド行きます！」

エリスとラナロウを載せたトルネードガンダムは後部ハッチから宇宙へ飛び出した。

そのころ―ブリッジでは。

「地球連邦軍の姿が見えないわ…」

ニキは腕を組み顎に手を当てて考え込んでいた。

「もう回収されちまってんじゃね～か？」

操舵席に座るイェーガーは欠伸交じりに呟いた。

「いたとしても、こう熱源がおおくちゃな～…」

シェルドも頭に手をあてお手上げの様子でいった。

「そうよね…」

ニキもモニターに広がるサイド7の残骸とデブリ郡を見つめた。

「ううん…いるよ」

そんな時、クレアが寝ているゼノンの膝にちょこんと座ったまま呟いた。

「…え？」

ニキは驚きそちらを見る。クレアはクスクスわらいながら。

「ほら～！コロニーそばに光るものが！なんちゃって～」

クレアとしては冗談だった。しかし…

「でかしたはクレア！！シェルド！最大望遠！！」

「え…？」

「あいあいさ！！」

シェルドは元気良く声を返す、そして最大望遠でクレアの言った座標を移せば、そこにはサラミス級戦艦が2隻いた。

「ええー！！」

驚きのクレアだったがそんなクレアをゼノンは膝から退かした。

「これはチャンスだ…本艦はエンジンを停止し！」

突然の指示にブリッジクルー全員が顔を向ける。

「これだけデブリがあれば、動いていた方が目立つ！マークを発進させよ！一気に叩け！！」

ニキは通信インカムを手にした。

「ザク！！発進準備！！」

ニキの声を聞いてドックに待機していたマークはザクへ向かう。

「マーク、油断大敵！」

マリアにいわれたマークはヘルメットを被る。

「たかが戦艦2隻にオレがやられるかよ、お前はブリッジにでも行っとけ」

マークは自信有りそうに呟き、ザクのコクピットへ映る。

「マーク」

コクピットに座るとケイから無線が入る。

「ザクの出力を少し弄って、機動値を上げておいたぜ」

「ほう」

マークはコクピットシートの脇からキーボードを取出し、ザクの変更点を確認する。

「十分だ、ありがたいぞケイ」

ケイは照れ臭そうに鼻をかく。

「なあに、隊長さんの機体だかんな…角も欲しかったか？」

「ん、次回からは付けてくれ」

その隣にマリアが映る。

「本当にザクで平気？」

その表情には不安が伺える。

「ああ、エリスにザクは扱えん…それにオレは…」

マークは言葉を濁らせ格好をつける。

「超強いからな！」

そんなマークの言葉にマリアはジト目になる。

「なら、さっさとサラミス位やっつけてきなさいよ」
マリアに背中を押されてマークはゆっくりとカタパルトへ向かう。

『マーク聞こえてる？出撃よ？』

痺れを切らしたニキがモニター越しに現れた。

「わかってるさ、モテ男は忙しくてな！」

マークはそう笑いながらコクピットでの最終調整に入る。

「シェルド、バズーカとシュツルムファースト、あとマシンガンをくれ。弾倉は二つ」

「はあ！？そんなに！？」

ニキからシェルドに切り替わり、シェルドはカタカタタイピングしはじめる。

「座ってるだけなんだから文句たれるな」

マークもキーボードを叩いてザクに装備を設定していく。装備を付け終えた所でキーボードをしまい、次にレバーを握り座席を合わせる。

「よし、マーク・ギルダーだ！！ザク！発進する！」

マークはカタパルトを使わずに開けられたハッチからゆっくりと出ていった。

「艦長！」

丁度その頃、サラミス級の部隊は望遠モニターでガンダムを探していた。

「どうした？」

モニターを見ていた隊員に言葉を返す艦長、しかし隊員は首を傾げる。

「あれ？…」

そんな中途半端な解答に艦長の男は侮蔑の表情を浮かべた。

「用が無いなら呼ぶな！ガンダムを探せ！！」

モニターの隊員は艦長に怒鳴られ竦み上がる。

「ひっ…すいません！」

そして…

「いま…ザクが見えたような気がしたんですよね…まあ…つかれてるんですよね…」

そう、隊員は小さくため息を漏らした。

「…バレて無いようだな」

マークはエンジンを切り、空間の流れに合わせてサラミス級へと近づいていった。ゆっくりゆっくり…蛇のように。

その頃エリス達は…

「ガンダム…ありませんね…」

「ああ…」

トルネードガンダムで空間を漂い、低出力のバーニアを吹かして、漂っていた。

「敵も見当たらねえな、好都合っちゃ好都合だな」

ラナロウはホルスターから拳銃を引きぬきいつでも戦える体勢を整えた。

「ラナロウさん！」

エリスが声を荒げ、ラナロウは顔を向ける。その先にはデブリに漂う。ガンダムの姿がそこにあった。

「艦長！！」

サラミス級の隊員が叫ぶ。

「どうした！！」

艦長の男は状況もつかめぬまま返す。そのモニターにはザクが漂っていた。

「なんだ…ザクではないか」

艦長は呆れたように声を漏らした。

「はい、外傷は見られませんが…機能はしてないようですね…」

「放っておけ、我々は宇宙人の扱う機体等最早必要ないのだ！早くガンダムを見つけよ」

そのザクにはマークが乗っていた。

「お優しい艦長殿だ…しかし、お陰で仕事が…楽に済みそうだ！」

マークはサラミス級が隣をすろ違うその瞬間、ペダルを踏み込みバーニアを最大に開く。そして態勢を切り替え右手のバズーカをブリッジへ向ける。

「なっ！」

驚きに目を向くサラミス級の艦長だったが、その瞬間、ザクのバズーカから撃ちだされた火の弾が、サラミス級のブリッジを焼き尽くした。

「何事だ！！」

隣を飛んでいたサラミス級の艦長が叫ぶ。

「ざ！！ザクです！！味方からのシグナル途絶！！」

「なんだとお！！」

マークはブリッジを失い身動き出来ないサラミスにシュツルムファーストを打ち込み、シュツルムファーストの炸裂と共にサラミス級は光の中へと消え。そのまま真っ直ぐにザクが突っ込んで来る。

「ザク！来ます！！」

「脱出すら認めぬか…おのれジオンめ…撃墜しろ！！」

サラミスはゆったりと砲座を回し横向きからマークのザクにビーム砲を撃って来た。

「射撃角度が甘いな…」

マークはスラスターを調整しつつ軌道をずらし、ビーム砲を紙一重にすり抜け接近する、そしてバズーカを構え放つ。

【ドオン！！】

エリスとラナロウはトルネードガンダムから降りて、宙域に漂うガンダムタイプのコクピットまで来ていた。

「燃料はまだあるみたいですね…」

「それに全くの無傷だ…流石はガンダムタイプだな」

ガンダムのコクピットハッチの上に乗り、外からコクピットを解放する方法を探す。

「でも…なんでエネルギーがあるのに動かないんですかね？」

「地上用だからだろ？スラスターパックが付いてない所を見ると、つける所で襲撃を受けたんだろうさ」

ラナロウはコクピットハッチ横に端子の差し込み口を見つけてエリスを招き寄せる。

「パイロット…生きてますかね」

「生きてたら死んでもらうか仲間になってもらうかだな…」

ラナロウは真顔でそう呟き、エリスも頷く。

「仲間になるヒトならいいですね…」

エリスは携帯ににた端末から端子を引き抜き、差し込むとコクピットを開放する。そしてラナロウと顔を見合わせ、二人でコクピットを覗き込んだ。中には…

「エリス！！」

「え？…きゃあ！！」

ラナロウはエリスの手を掴み引き寄せた。

【ドオン！！】

そのすぐ後に銃声が響き、エリスのヘルメットを銃弾が擦った。コクピットの中にいたパイロットからの銃撃だった。ラナロウは咄嗟に拳銃を抜いて身を乗り出した引き金を引いた。

【ドン！！ドンドンドン！！】

放たれた弾丸はパイロットの銃を弾き、身体を抉り、頭部を撃ち抜き貫いた。

「ら…ラナロウ…さん」

「エリス、コクピットに戻れシートに座るまで…決してこっちを見るな」

ラナロウはエリスの身体を引き寄せ、背中を押してコクピットの方に飛ばし、コクピットの中のパイロットを外に出して蹴り飛ばしコクピットに入る。

「大丈夫ですか？ラナロウさん」

コクピットに戻ったエリスはラナロウに通信を送る。

「駄目だな…完全に駆動系がイカレてやがる…ガンダムで運ぼう」

ラナロウはコクピットからでてトルネードガンダムの方へやって来ると、エリスは手を伸ばしてラナロウを掴みコクピット内に招き入れコクピットハッチを閉めた…その時。

「ラナロウさん…」

「あん?…」

エリスは太陽の方に輝く蝶の羽を見つめていた。

「うわあああっ!!」

場面は変わり、サラミス級のブリッジをバズーカで吹き飛ばしたマークもそれを見ていた。

「…ウォーズブレイクか」

キャリーベースの中でも確認が為される。

「なんだ…ありゃ」

シェルドは目を見開き、ニキはゼノンに身体を向ける。

「…ウォーズブレイクだ…」

ゼノンは目を閉じて告げた。格納庫にいたマリアはケイの隣に行く。

「どうしたんだい少佐どの?」

ケイはマリアにきにせず端末を操りトルネードガンダム1号機の修理を進めていた。トルネードガンダムは予備のパーツが足りず片足

が無い。

「ケイ、お願いがあるの…」

「はあ、なにかな?」

ケイは目を細め顔を向ける。

「この子を出れるようにして?」

「1号機をか!?」

ケイは驚きを顕にして、身体を向ける。

「無理だ!片足じゃバランスが取れねえの!こいつは出せねえよ!!」

「なら松葉杖でも片足に取り付けて艦のカタパルトにいれればいいわ機銃変わり位にはなる!」

マリアはさらにまくしたてる。

「ウォーズブレイクしたの!何が来るか分からないんだったら…戦力は1機でも多いほうがいいでしょ!」

「わかったわかった!予備のザクの足を付けとくよ…」

マリアの勢いに負けたケイは端末を操りだした。

「さあ…何がくる?」

機銃やブリッジを失ったサラミスを背後に放置し、蝶の翼が消えるのを待った。するとその方向から2隻のマゼランとサラミスが浮かび上がった。

「たった戦艦2隻?…」

マークは拍子抜けして安心する。

『此方は地球連邦軍115艦隊ホークアイから、ジオン軍に通告する。武器を捨てて投降せよ、繰り返す。武器を捨てて投降せよ』

「…月光蝶の尖兵じゃない…」

その瞬間マークの背筋を寒気が駆け抜けた。

『投降の意志は無いようだな…これより撃墜する!』

その瞬間、マゼラン級戦艦は背後から飛んできた巨大なビーム砲により蒸発し、マークのザクにも迫る。

「!!!!」

マークは慌ててスラスターを吹かせ、上昇することですれすれで避ける事に成功する。ビーム砲は背後にあったサラミスをも吹き飛ばし蒸発させた。

「なんだありゃあ！！」

イェーガーは驚き声を挙げた。

「シェルド！最大望遠！！」

「今やってるよ！！」

シェルドが最大望遠にモニターを切り替えれば、台形のような形の物体が太陽から此方に向かって来ていた。

「なんだよこいつは…」

マークもザクのモニターから見ていた、白く大きなそれは背後からサラミス級に攻撃を仕掛けた。

『な！？なんだこれは！！』

『撃てっ！！落せ！！落すのだ！！！』

サラミスの乗組員らの声が響き、サラミスは急速で回頭しながらビーム砲を乱射する。しかしビーム砲は巨大なそれに直撃するも球体のような見えないバリアに弾かれ分散され、そしてそれは下部に取り付けられた二本の腕のような物を展開し、そこから巨大なビームサーベルが生え、そのままサラミスに向かう。

『ビームが効かない！？』

『うわあああっ！！！』

サラミス級はビームサーベルにより真っ二つにされ、爆発した。

「なんっつう…」

見ていたマークは驚きに目を見開いていた。

「おおお！」

ブリッジにやってきたクレアが叫びモニターにへばりつく。

「クレア！あれが何か分かるの！？」

ニキは慌てて聞くとクレアは身体を向ける。

「何って…デンドロだよ！デンドロ！ＧＰ－０３Ｄ！！」

「なんっ…だとお～！？」

「艦長！！ガンダム試作三号機だ！！」

ラナロウからの無線がブリッジに入る。

「ラナロウ君？ガンダムは？」

ニキに聞かれたラナロウは頷く。

「回収は終了した」

「良かった…なら早く戻って」

ニキとの無線が切れ、エリスは操縦桿を握る。

「ガンダム試作三号機って？」

エリスは隣から焦るラナロウに聞けばラナロウは小さく頷く。

「宇宙世紀００８３で実際に使われた兵器だ…」

ラナロウは忌々しそうに言えば、エリスは頷く。

「あんなものが相手じゃマークさんが…」

「ああ…急ぐぜ！！」

エリスは頷き、ガンダムを抱えたままバーニアを吹かせた。

「艦を前に出せ」

艦長であるゼノンはニキに命令を告げる。

「あんなのに見つかったりしたらこんな船直ぐに…」

ニキはサラミスを破壊して獲物を探して巡回するデンドロビウムを指差した。

「見付かるのは時間の問題だ…ここで見つかったら満足に回避も出

来ないぞ！」

ゼノンの言葉にニキは汗を垂らし緊張を顕にする。

「マーク聴いた？」

無線でマークに告げれば、マークがモニターに現れる。

「ザクに陽動を期待すんなよ…だが、今はそれしかないな」

エンジンを切っていたマークは身を乗り出してレバーを握る。そして…

「ち…エリス！オレを降ろせ」

ラナロウは急に身を乗り出した。

「え！？なにい…」

「オレはあっちのガンダムでキャリーベースにいく…おまえは隊長の援護しにいけ！」

「ですが！あのガンダムは駆動系が…」

するとラナロウはヘルメットを寄せてエリスに顔を近付ける。

「行けっ…こっちはなんとかするさ…」

ラナロウはそういって座席のボタンを操りコクピットハッチを開き

外へ出た。

「ラナロウさん！」

「後で会おう！」

ラナロウはヘビーガンダムに乗り込み、コクピットを閉じた。

「行くぞ！！」

マークはエンジンを掛けながら一気にスラスターを展開して動けば、デンドロビウムは素早くザクを察知して身体を向けようとしているがその間にマークは背面に回り込む。

「食らえ！！」

バズーカを構え、バーニアの一つに向かい放つ。

「キャリーベース発進！！」

ゼノンの一声でキャリーベースは動き出す。

「艦長！」

マリアがモニター一杯に現れる。

「どうしたのかね？マリア君」

「トルネードガンダムを私にお貸し下さい！機銃変わりにはなって

みせます！」

マリアは熱意ある眼差しで叫び、ニキは心配そうに目を向ける。

「1号機は片足がないはずだが？…」

ゼノンも怪訝そうな表情を浮かべニキも頷く。

「ケイに頼んでザクの足を着けました。カタパルトデッキでの戦闘位ならできます！」

マリアはモニターを叩かん勢いで叫んでいた。

「良かろう…好きにしたまえ」

「艦長！」

「ニキ君…」

ゼノンは首を横に振り、それを見たニキは大きなため息を吐き出した。

「行きなさい…」

「了解！」

【ドォン！！】

マークの放ったバズーカの弾は、デンドロビウムのバーニア上の装

甲に当たり弾かれた。デンドロビウムが急激なローリングをしたからである。

「ち！！旋回が早い！？」

ザクはその側面に付きまとい、２発３発とバズーカを打ち込むが、デンドロビウムの装甲にはびくともしない。

「化け物めっ！」

そうしていると、デンドロビウムは急に進路を変える。

「なに！…」

マークはその先に目を向ける。そこにはキャリーベースがいた。

「キャリーベース逃げろ！！デンドロビウムが行くぞ！！」

マークは無線に叫びかけた。

「わかってるわ！」

ニキは焦ったようすで砲座に腰掛ける。

「ミサイル！メガ粒子砲用意！オート機銃モード起動」

「ニキ君！メガ粒子砲はだめだ！ミサイルで牽制しろ！」

「了解！！ミサイル発射！！」

キャリーベースからミサイルがばらまかれるように発射され、同時

にデンドロビウムも白いカーゴが開き、二つのミサイルコンテナを吐き出した。

「やらせるか！マークは接近し、至近距離からバズーカを放つ。しかし装甲はびくともしない」

【ドドン！！】

同時に二つのミサイルコンテナが吐き出され、キャリーベースに向かう。

「ミサイルコンテナがいっ…」

言い掛けたマークのザクに白い装甲が迫る。

「うわああっ！」

マークは避け切れずにもろに食らい吹き飛ばされる。

遠くでミサイルコンテナが弾け大量のミサイルが射出される。

「ミサイル接近！！」

シェルドの声が響き、イェーガーは操舵桿を思い切り引いて艦首を下げる。

「迎撃だ！！」

ゼノンの指示を受けたニキは機銃を起動させ、ミサイルを迎撃してゆく。しかし網のように擦り抜けたミサイルが艦に接近する。

「だめだミサイル直撃します！！」

ニキの言葉に全員頭を抱える。

「マリア・オーエンス！トルネードガンダム１号機！！迎撃行動に出ます！！」

無線に割り込むマリアの声、それとともにザクマシンガンを二つ着けたトルネードガンダムがカタパルト上に現れ、直撃コースのミサイルを片っ端から叩き落とした。

「マリア君！助かった！」

ゼノンは立ち上がり、礼を言おうとすれば、マリアは首を横に振る。

「まだです艦長！」

爆発の煙を突き抜けたデンドロビウムが一気にキャリーベースに迫る。

「でああああ！！！！！」

両手のガトリングガンとザクマシンガン、腹部ビーム砲、頭部バルカン…マリアは全身の火器を撃ちまくった。しかしデンドロビウムは止まらない。下部に着いたアームからサラミスを切り裂いた巨大ビームサーベルが生える。

「イェーガー！！」

ゼノンはイェーガーに怒鳴るが、イェーガーは既に艦を下に向けていた。

「避けきれねえ！！」

イェーガーは声を搾りだし、ブリッジ目がけてピンク色の光が迫る。

「うわあああ！！」

全ての人間がデンドロビウムから目を反らした。

「あああああっ！！」

しかしデンドロビウムの右側に誰かが叫びながら取りつきバーニアを全開に開いて押し出す事で、ビームサーベルの角度がズレてブリッジの上を素通りする。

「エリス！…」

マリアが叫んだ。デンドロビウムに取りついたのはエリスのトルネードガンダムだった。

「皆を守る…誰も傷つけさせるもんかあああああっ！！！！」

エリスの額の辺りで何かが弾け広がって行く。

エリスのトルネードガンダムは急にビームライフルをデンドロビウムのオーキスとよばれる右部分に突き刺して引き金を引いて離脱する。

【ドォン！！】

中のミサイルコンテナに引火して爆発し、オーキス上部が弾けてデンドロビウムの全身が下に傾き、エリスのトルネードガンダムは爆風で上に打ち上げられる。

デンドロビウムはすぐさま反転してメガビーム砲の砲心をエリスに向けて突きを放つ。

「……」

エリスは両手にビームサーベルを引き抜き、右向きに機体を反らして一撃を避けてから右のビームサーベルで砲心を切り上げ、デンドロビウムの勢いに逆行するように右のアームを切り捨てる。

「キャリーベース！！」

エリスはエリスとは思えない声で叫んだ。

「Ｉフィールドジェネレータを破壊します！爆発確認後に主砲で攻撃を！」

「え…ええ…」

唖然としていたニキだったが小さく頷き、反転したデンドロビウムに照準を合わせる。

「はあああっ！！」

左のアームからビームサーベルを展開するデンドロビウム、エリスは正面から斬り掛かる。

衝突しあう二つの機体、しかしデンドロビウムの中に入っていたステイメンはビームライフルを引き抜きエリスに向かって撃ちだした。エリスはビームライフルの攻撃をビームサーベルで切り裂き、激突の瞬間に下に潜り、すれ違い様にIフィールドのジェネレータにビームサーベルを突き立て引き裂いた。

【ドォン！】

激しい爆発、それを確認したニキは引き金を握る。

「沈めー！！化け物！！」

ニキは引き金を引くと、キャリーベースの主砲が発射され、オーキスを貫いた。

【ドォン！！】

爆発オーキスの中からガンダムタイプ。ステイメンが姿を現す。エリスはステイメンに向かって突撃する。

「はあああっ！！」

しかし…

【ドォン！！】

激しい機動に、トルネードガンダムのスラスターは既に限界だった。
オーバーヒートしたスラスターを開いた瞬間に爆発したのだ。

「きゃあああ！！」

トルネードガンダムはグルグルと無防備に回りだす。ステイメンは無慈悲に右手のビームライフルを構えた。

「いや…！」

エリスの脳裏に死の瞬間が過る。しかしその直後。

【ダダダダ！！】

横合いからのマシンガンによる銃撃がステイメンのビームライフルが弾き飛ばす。

「エリスにばかり格好つけさしてたまるか！」

同時にボロボロなマークのザクが突っ込んで来た。ステイメンはビームサーベルを引き抜いてマークのザクへ向かう。

「はあああ！！」

マークはヒートホークを抜き放ち、マシンガンを片手に接近すると、ステイメンは真っ直ぐにビームサーベルを伸ばす。マークのザクは機体を横に避け、マシンガンをステイメンの腕に押し付け…撃つ。

【ドォン！】

至近距離からの一撃にビームサーベルを手放すステイメン、マークはその頭にヒートホークで叩きつける。

【ガイイン！！】

しかし流石はガンダムタイプである、ヒートホークでの一撃では深く入り込まず、その手を掴まれてしまう。

「うおおお！！」

マークは吠えてマシンガンでコクピットを貫き、引き金を引いた。

【ドォン！！ドドドドド！！】

ステイメンは身体を躍らせて手を離し、マークはそのステイメンの機体を蹴飛ばした。

「やったか…」

マークはステイメンの昨日停止を確認し、エリスに身体を向けようとした。

「マークさん！！」

エリスは見ていた機能が停止したはずのステイメンの手が、コクピットのマシンガンを引き抜き、マークのザクに向け構える瞬間を…。

「な！！…」

マークは驚きに目を見開き、声を漏らす。

【ドォン！！】

弾ける爆発音、しかしそれはステイメンのマシンガンの音では無かった。

「しつけえんだよ！！おらあああ！！！」

そこにラナロウの通信が入り込み、ヘビーガンダムが飛び込んで来る。

「ラナロウさん！…」

ラナロウのヘビーガンダムはそのまま接近し、頭に付いているヒートホークをつかんで振り上げ、頭から切り裂き真っ二つにし、そしてキャノン砲でステイメンをぐちゃぐちゃに粉砕した。

「ラナロウさん！！」

「遅くなってわりいな！…配線見てたら時間くってよ…」

ラナロウはヘビーガンダムをあの場で修理してやってきたのだ、エリスはそんなラナロウのヘビーガンダムを見て、安心しそして…。

「良かっ…た…」

張り詰めた緊張が解れ、一気に疲れが押し寄せたエリスはそのまま気を失った。

「あおい！エリス？エリスー！！？」

同時に宇宙に亀裂が走り、白い光に包まれた……。

「ん……んんっ…」

エリスが目を覚ますと、何時もの白い天井だった。

「ここは？…」

エリスは身を起こす。しかしキャリーベースの医務室ではない。

「……」

パーテーションをずらせば隣のベッドにはマークが寝転がっており、マリアがその横にいる。

「お！起きたかエリス！」

振り返ればラナロウが果物の籠を持ってパーテーションを全開に引く。

「え…あ…」

「ここはジェネレーションフォースの月基地だ」

隣にいたマークが言えばマリアも頷く。

「え…」

「あなたが尖兵を倒した後に、白い光に包まれて…気が付いたら月基地の近くにある宙域を漂っていたらしいわ」

マリアの言葉にマークも頷く。

「当然だ…月光蝶の尖兵を倒したんだから。あの時代にはもう用はないからな…」

「マークさん、月光蝶の尖兵って…なんなのですか？」

エリスの言葉にマークは少し渋い顔をした。

「黒歴史にしている元だ…特定の条件を満たしたウォーズブレイクにより現れる…」

「倒せば、黒歴史は歴史となり…記憶となる」

ラナロウが据え置きのテレビをつけると、一年戦争の特集がやっていた。

「ヘビーガンダムも持ってこれた、いまフルアーマーガンダムにする為に改良中だ」

「え！？でもフルアーマーガンダムは…」

「黒歴史ってのはオレらにゃ関係ねえから心配すんなよ」

ラナロウはベッドに腰を下ろした。

「ちなみにフルアーマーガンダムはオレのもんだからな！」

何処か自慢気にいうラナロウだったがマークは身体を起こす。

「フルアーマーガンダムはオレが貰う…」

マークの言葉にラナロウは一気に不満を訴える。

「はあ？隊長ずりいよ！！」

「お前にはトルネードガンダム１号機があるだろ？それに装甲と火力以外はトルネードガンダムの方が上だぞ？」

「ぐぬっ…」

それを言われて黙り込むラナロウだが、マークはエリスを見た。

「しかしお前がまさかＳＥＥＤを持つ人間だったとはな…」

マークの言葉にエリスは首を傾げた。

「ＳＥＥＤ？」

「コズミックイラという黒歴史にある特異な体質だ…頭の中で種が弾けるような感覚の後…戦闘力が飛躍的に向上するらしい…しかし、良くはわかっていない」

エリスは今までの戦いの中で頭の中で何かが弾けた時の記憶が薄く、

良く覚えてはいなかった。

「ふん…エリスみたいに扱えればトルネードガンダムでもガンダム試作3号機を倒すことだって出来るんだ。ラナロウ…トルネードガンダムは凄いだろ?」

わたしは凄いんじゃないんですか…とエリスは心の中で囁くも黙っていた。ラナロウはというと…。

「エリスなんかに負けるかよ!!見てろエリス!!お前なんて直ぐに抜かしてやるからな!!」

ラナロウは捨て台詞を吐き、出ていった。

「わたしも…行こうかしら」

マリアは立ち上がるとスカートのしわを叩いて伸ばした。

「ん?何処へ?」

マークが聞けば、マリアは口に指を当てる。

「内緒…」

そして部屋は二人きりになった。

「マークさん…」

「ん?」

エリスは少し控えめに、シーツを摘んで握る。

「もう少し…ジェネレーションフォースにいても…いいですか？」

自分の意志を固めた瞳はマークを見つめた。

「何言ってんだ…トルネードガンダムに乗った時点でお前はオレの隊の一員さ…今更抜けたいなんて言われても無理な話だな」

マークは照れたようにテレビに目を向けた。そこには一年戦争の戦いがいつまでも映されていた…。

【宇宙世紀００８７】（前書き）

一年戦争の介入から1週間、エリス達は新たに戦いの場へと赴くのであった。

【宇宙世紀００８７】

最初の介入に成功したエリス達ジェネレーションフォースは、次なる介入にむけて準備を行っていた。

「なんですか？これ」

エリスはモビルスーツドックにいた。ドックにはトルネードガンダムが2体、それと隊長であるマーク・ギルダーの乗るフルアーマーガンダム。そして白い布に包まれた機体が運び込まれていた。

「さあな…」

隣であきれ顔をしていたラナロウは、ジュースを片手に背を向ける。
そんな時

「エリスさん！ラナロウ君！！」

下から懐かしい声が響いた、エリスが顔を下に覗かせると、長い茶色髪に帽子を被り、白と黒を基調とした軍服を着た女が手を振っていた。

「マリアさん！？じゃああれ…」

エリスは思わず身を乗り出し叫び返した。

「ええ！そうよ！久しぶりですね」

最初の介入から三週間が過ぎていた。マリアは介入の報告をしに一

路軍に戻っていた。

エリスはデッキからマリアのいるドックに降りて向かう。そこではマリアとケイが話し込んでいた。

「またあんたが帰ってくるなんてね…」

「はい、マークを一人には出来ませんから…」

そして二人は上を見上げるそこには、白い布に包まれた機体がある。

「マリアさん」

エリスはマリアの背中に声を掛ける。エリスに気付いたマリアは振り返った。

「エリスさん、また宜しくね？」

「はい！此方こそ」

二人は再会の握手を交わし、そして共に白い布を見上げる。

「軍から持って来たの、今度は邪魔にはならないわ」

マリアは端末を操り布を剥がした。そこには三角形のような頭をした白い機体があった。

「【ＯＺ－１２ＳＭＳトーラス】という機体よ、Ａ．Ｃ１９５年という黒歴史に実際にあった機体よ」

「へえ、トルネードガンダムより一回り小さいですね…」

エリスの意見にマリアも頷く。

「ええ、でも性能はお墨付きよ?軍から一機持ち出すだけでも大変だったんだから」

ケイは見上げながら頬をかく。

「おまけに万能使用に改良されたタイプじゃねえか…高スペックな物を持ってきたな…」

「軍はそれだけ、介入に力を入れはじめたという事ですよ」

マリアは自信を伺わせた表情をした。

「そう言えばエリスさん、マークは?」

「マークさんはブリッジですよ」

「そう、ありがとう」

マリアはさっさとブリッジへ向かって行った。

「あいつも熱いよな、お前もブリッジにいきな…そろそろ二回目の介入だろ?」

「はい」

ケイは欠伸をして端末からデータを見始め。エリスも追い出されるようにブリッジへと向かった。

ブリッジでは、早速マリアとマークによる夫婦喧嘩が勃発していた。

「バカか！あんなオーバースペックな機体を持ってくるなんて何考えてんだ！」

「いいじゃないですか！軍だってわたしに死んで欲しくないんですから！ジェネレーションフォースの軟弱な武装だけでは軍は心配なんですよ！！」

「だからといってトーラスを導入するのか！？」

「トーラスならガンダムに匹敵する力を持っています！しかし強過ぎる力ではありません！」

「……」

「……」

二人は終始睨み合いう。

「夫婦喧嘩は終わりかしら？」

そこで今まで黙っていたニキが間に入り込む。

「夫婦じゃない」

「夫婦じゃありません」

マリアとマークは同じようにいきぴったりに叫んだ。

「ニキさん、次は何処へ介入するんですか？」

エリスが空気を変えようと手を上げる。

「ブリーフィングで言ったじゃない、次は宇宙世紀００８７よ？前回介入した一年戦争から7年後よ」

ブリーフィングで聞いていたエリスは再確認し、頷いた。宇宙世紀００８７…ジオン公国軍に勝利した地球連邦軍は増長し、コロニーに対し支配と圧力を強めていた。やがて連邦軍内部に「ジオンの残党狩り」を名目に、スペース・ノイドへの強制的制裁を加えるエリート部隊「ティターンズ」が創設された。急速に勢力を拡大したティターンズに反発する一部の連邦軍人やスペース・ノイド達は反地球連邦組織「エゥーゴ」を結成する。

エリスは回想を終えてゼノンに目を向ける。ゼノンは立ち上がり全員を見回した。

「これより！介入を開始する、キャリーベース発進！！」

「了解！」

叫びと共に、キャリーベースが動き出し、介入行動が始まろうとしていた。

【木星帰りの男】（前書き）

宇宙世紀００８７．４月末へとやってきたエリス達、これは総勢な戦いの序章に過ぎない。

【木星帰りの男】

二回目の介入を開始したエリス達を乗せたキャリーベースは、【宇宙世紀００８７】の地球軌道にいた。

「しっかし、流石はミラージュコロイドだな～」

ブリッジの前をティターンズのサラミス級が、平然と横切るが、バレる気配はない。

イェーガーは関心しながら頭の後ろで手を組んだ。只でさえ目立つカラーリングであるキャリーベースが地球軌道に漂っていられるその理由は、ミラージュコロイドとよばれるコズミックイラという黒歴史内に存在する技術が使われているからであった。ミラージュコロイド起動中は、レーダーに探知されず視認も難しいとされ、強襲や電撃作戦に用いられる。それを搭載したキャリーベースは、まさに幽霊船である。

「こんなに地球は美しいのに…」

エリスは娯楽室で無重力な空間に漂ったまま、モニターにうつされた地球の映像を眺めていた。この宇宙世紀にやってきて3日、予測された頭痛もなければ、ミラージュコロイドのお陰で戦闘すらない…そんな状況ではあるが、地球軌道では今日もビームが飛び交っている。エゥーゴとティターンズの艦隊による戦闘が行われているのだ。

当初は介入しようとしたエリスだったが、隊長であるマークにより

却下された。

「退屈だな…シュミレーションでもやりいくか？」

ラナロウのシュミレーションへの誘いは日課になりつつある。

「はい…行きます」

エリスは欠伸を噛み殺し、ラナロウの背中を追い掛けた。

「エリス、ラナロウ…何処へ行くんだ？」

その背中をマークの声に呼び止められ二人は振り返った。

「え…」

二人は顔を見合わせると、マークは鷹のような鋭い瞳で二人を睨む。

「これからミーティングだ、パイロットスーツに着替えたらドックに集合しろ」

それはこれから始まる戦いの幕開けに為る事を、この時の誰も予期してはいなかった。

ドックへ集められたエリス達はマークの前に集合する。

「やっと実戦っすか？」

デスクにだらしなく座るラナロウが言えば、マークは頷いた。

「ああ、そうだ…そろそろこの地球軌道にアーガマがやってきて大規模な降下作戦が行われるのは知ってるな？」

エリスもラナロウも頷きラナロウは姿勢を正した。

「我々の任務は、部隊の降下を終えたアーガマの撤退支援と追撃のティターンズ艦隊の殲滅です」

マリアはホワイトボードにモニターを映し、ティターンズのＭＳのデータを掲示してゆく。

「よって各員は第二種戦闘配備…このミーティングが終わり次第コクピットにて待機だ、いいな」

「「了解」」

エリスとラナロウは同時に敬礼すれば、自分の機体に向かった。

「トーラスの実戦配備か…」

マークはマリアの横で呟いた。

「目立ち過ぎるなよ？量産されたら厄介だからな…」

マークはそう苦笑すれば、マリアは笑い返す。

「大丈夫ですよ、わたしの敵じゃありません」

マリアは言いながら両手に何かを挟んでいる。

「お前それっ！！」

マリアの手にしていた物は、【ハロ】とよばれる自動演算と機体のバランスを整える機能を兼ね備えた自力型ＡＩである。

「これがあれば反応値倍ですよ」

マリアは言いながらハロの電源を入れた。

「宜しくね、ハロ？」

『よろしくな、ようやくな』

電源を入れられたハロは、何度もバウンドしてからマリアの胸の間に体を埋め、マリアはにこやかに自らのトーラスに向かう。

「まったく…現金なやつだ…」

ため息を吐き出したマークも、自分のガンダムに向かった。そして…

【各員に通達、各員に通達…地球軌道上にてエゥーゴとティターンズの大規模な戦闘を確認、降下作戦開始されました…繰り返す、降下作戦開始されましたＭＳ隊発進して下さい！】

赤いブザーランプと共に発進へと切り替わる。

「追いでなすった！行くぞ」

「「了解！！」」

エリス達はカタパルトへ向かう。ブリッジではゼノンが無線マイクを片手に何かを待っていた。

「キャリーベースよりアーガマ、キャリーベースよりアーガマ聞こえるか」

ゼノンはゆっくりとした口調で告げれば、暫くしてモニターが開かれる。

「アーガマ艦長ブライト・ノアです、キャリーベース」

「わたしはキャリーベース艦長、ゼノン・ティーゲルだ…これよりエゥーゴ艦隊の撤退援護を開始する」

「な、なんだって！？」

一瞬取り乱した、モニター越しのブライトは、直ぐに冷静に推理し、顎に手を当てる。

「何処の部隊かは知りませんが、現在の我々にティターンズを退ける戦力はない。支援感謝します…」

ブライトは姿勢を正し敬礼してくれば、ゼノンも敬礼を返して無線を切り立ち上がる。

「ＭＳ隊発進！！」

ゼノンの言葉にカタパルトが開放される。

「準備はいい？マーク」

マリアのトーラスはカタパルト内で可変し、可変したトーラスにマークのフルアーマーガンダム掴まる。

「オレはいつでもいい。宙域までの運搬は頼んだぞ」

マークはコクピットで腕を組み、目を閉じた。

『トーラス発進！トーラス発進！』

ハロが発進アナウンスし、マリアは操縦桿を握る。

「マリア・オーエンス、マーク・ギルダー！発進します！」

二人はカタパルトから打ち出され、真っすぐに戦闘域へ向かう。

『エリス！2号機は機動値をいじっといたから、確認しておいてくれ』

ケイからの無線を受けてエリスは頷く。

「了解です！エリス・クロード、トルネードガンダム2号機！発進します！！」

エリスのトルネードガンダムはカタパルトから打ち出されてトーラ

スを追い掛け。その後ろをラナロウの1号機がついてくる。
先行したマークとマリアは、アーガマとすれ違い、背後のサラミス改へと向かう。

「あれは…？」

アーガマのブライトは、ブリッジからその2機を見ていた。

「片方は、戦闘機のようです、乗ってるのは…ガンダム！？…実験初号機です！」

「ガンダム…だと？」

オペレーターであるトーレスの声にブライトは表情を曇らせた。

「さらに！2機！！来ます！！」

遅れて発進したエリスとラナロウもアーガマとすれ違う。

「またガンダムタイプ！？…なんなのでしょう、彼らは…」

トーレスはガンダムタイプを撮影し、ブライトに顔を向けた。それを受けたブライトは渋い表情になる。

「さあな…ただ敵で無いことを祈る」

ブライトはそういいながらエリス達を見送り、遅れてキャリーベースとすれ違う。

「すっげー！あれがアーガマか！」

キャリーベースオペレーターのシェルドはにこやかにアーガマを撮影する。

「後の英雄ブライト・ノア…か」

ゼノンは何処かつまらなそうにアーガマを眺めていた。

舞台は再び戦場へ―

「サラミス改２隻！、ハイザック１２、ガルバルディβ８！」

マリアは前の端末に差し込まれたハロから受けた情報をマークに叫ぶ。

「楽勝だな…船はオレがやる、雑魚は任せたぞ」

「了解！先行して仕掛ける！」

フルアーマーガンダムはトーラスから手を離してゆっくり離れていくと、トーラスは加速し、先行する。

「敵の所属不明の戦闘機！此方に向かって来ます！」

サラミス改のブリッジでオペレーターが叫ぶ。

「戦闘機等敵ではない！！ミサイル発射だ！！」

戦艦より放たれた大量のミサイルがトーラスへと迫る。

「そんなもの！！」

『楽勝！楽勝！』

トーラスはハロの演算能力と、持ち前の運動性を生かして飛び回り、ミサイルとミサイルの間を巧みに避けながらミサイルの中を切り抜けミサイルの中を突破する。

「は！！早い！？真っ直ぐ此方へ向かって来ます！！」

「ぬえええい！！戦闘機風情に何をしているか！！ＭＳ隊に迎撃させろ！！」

サラミス改の指揮官の命令よりも早くマリアのトーラスはビームライフルを発射した。

【ズギュン！】

放たれたビームはまっすぐ呆然としていたハイザックのコクピットを貫いた。

「う！！うわあああっ！！」

瞬く間に光の玉となるハイザック、そんな光景をみたティターンズ

の兵士達は状況を理解し切り替える。

「囲め！戦闘機だからと油断するな！」

兵士長は兵士達に指示を飛ばしてマリアを囲もうと散らばり始め、マリアはレバーを思い切り引いた。

【ギィイン！！】

トーラスは鳴き声のような機動音と共に上昇しながらゆっくり可変し人型となり、黄色いアイカメラが不気味に輝く。

「か！！可変したあ！？」

驚くティターンズの兵士達。

「敵はたった一機だ！数で攻めろ！！一気に叩くのだ！！」

ＭＳ部隊の隊長は見事な指揮をさす…が、そんな間すら命取りとなる。

『多重ロック！多重ロック！』

ハロの声に合わせ、マリアは次々に引き金を引いた。トーラスはリズミカルな腕の動きに合わせてビームライフルを発射する。発射されたビームは次々にティターンズの機体を粉砕し、３つの光の玉に変えていった。

「いっ！一瞬で３機！！？」

隊長は驚きの声を挙げ、飛んできて黄色い輝きに包まれ光の玉になった。

「た!!隊長ー!!つ!強すぎる!!うわあああっ!!」

そんな通信の間にもまたあらたに1機のハイザックが光になる。マリアのトーラスに見事に攪乱された部隊は、索敵能力を失う。

「マリアばかりに攪乱されているなんてな…情けない部隊だ!!」

そこに、突然サラミス改のブリッジに躍り出たマークのフルアーマーガンダムは、ブリッジを右腕の2連ビームキャノンを発射した。

「が!ガンダム!?ガンダムだああ!!」

サラミス改のブリッジは見事に吹き飛び、その隣を航行していたサラミス改の指揮官は驚き目を見開く。

「な、なんだあ!?」

しかし遅かった。振り返ったマークのフルアーマーガンダムの右肩のキャノンが発射され、サラミス改の艦長は、ガンダムの存在に気付く前にブリッジを粉砕され、命を散らした。

「ま、容赦しねえよな…」

マークは右腕のビームキャノンで航行不能になったサラミス改を次々破壊して光の玉に変える。そうしてる間にマークを10機の機体が囲む。

「よく周りを見ろよ…」

マークはそう言うと、ビームの火線が2つ飛んでくる。一つは背後のガルバルディβのコクピットを貫き、1つは真横のハイザックの頭を破壊した。

「行くぜー！！」

ラナロウとエリスだった。ラナロウとエリスはすかさず飛び込み、背中あわせにビームライフルを撃ちまくり、敵を分散させる。

【ドドドドド】

分散した敵は上から降り注ぐビームの嵐を受けて次々に撃墜されていく。

上では白いトーラスがビームバズーカとビームライフルを両手に構えひたすら撃ちまくって次々とティターンズの兵力を奪っていく。

「マリアさん凄い…」

エリスは言いながら迫ってくるハイザックの攻撃を後ろに身を引いて避け、ビームサーベルを引き抜き下降して脇をすり抜けながらその両足を切り裂いて後ろに周り、背中を蹴飛ばして、ビームライフルを構え両腕を撃ち抜き破壊した。

「エリス！残すなよ！」

ラナロウは動けないハイザックを撃ち抜き光の玉に変える。

「ラナロウさん！わたしは殺したいわけじゃ…」

「やらなきゃやられるさ」

ラナロウは容赦なく敵のコクピットを撃ち抜いて爆発させていく。

「それでも…わたしは…」

そうしている間に、２０ものＭＳは全滅していた。

「骨が無いわね…」

マリアのトーラスがゆっくりと降下してきて横に並ぶ。

「ティターンズなんてそんなものだろ？」

マークはそう言い周囲を見回した。

「周囲に機影なし…これより」

しかし…

「上です！」

エリスは素早く反応して上に向かいビームライフルを発射した。

「な！？」

ラナロウも慌てて目線を送る。そこにはデブリがありビームはデブリを撃ち抜くと、そのデブリの背後から紫色の機体が顔を出した。

「あれは！！」

マークは声を吐き出す。その前にエリスは動いていた。

「はあああ！！」

エリスは紫色の機体に突撃してビームサーベルを引き抜く。紫色の機体は頭の上にのるようなバックパックから大量のミサイルを吐き出す。

「やめろエリス！！そいつと！！そいつとは戦うな！！」

しかしエリスは止められなかった。単純に気持ち悪い感覚だったのだ。ミサイルの中を掻い潜り、紫色の機体にビームサーベルを振り下ろす。しかし紫色の機体は後ろに身を引いて子供あやすかのように避けた。

「はあああ！！」

エリスは腹部の拡散ビーム砲を発射するも、紫色の機体は体を抱えるようにする動作のみでビーム砲を受けきるが装甲にダメージすら与えていない。

「離れなさい！エリス！！」

そこにマリアのトーラスが突っ込んで出来てビームライフルを乱射す

る。紫色の機体は可変し、ビームライフルを華麗な動きで避けていく。マリアのトーラスも可変し、その後を追撃する。

「マリアさん！！」

エリスは紫色の機体のコースを予測して先回りしようとするが、紫色の機体は途中で可変して人型に戻る。

「！！」

ビームサーベルを引き抜き、マリアのトーラスに振るう。突っ込んでいたマリアは機体を減速させながら可変し、ビームサーベルを引き抜いてビームサーベル同士で打ち合う。

「く！！」

マリアのトーラスはバーニアを巧みに操りながら紫色の機体のビームサーベルを振り払い、ビームライフルを構える。しかし紫色の機体は先読みしており、トーラスよりも二回りも巨大な機体で体当たりを食らわせてきた。

「うわああ！！」

小さなトーラスは吹き飛ばされてしまい。切りもみ回転すればコクピットのマリアは頭をぶつけて意識を失ってゆく。紫色の機体は無慈悲に頭の上にあるビーム砲を向ける。

「あああああ！！！」

エリスの額で何かが弾け、叫びながらバーニアを全開に開いたトル

ネードガンダムは、一気に突撃してゆく。

「な！…」

紫色の機体に乗っていたパイロットは驚きを顕にし、そのまま激突する事で、射線をずらす。

「しゃらくさい奴め！！」

エリスの頭にざらざらした男の声が響く。紫色の機体はビームサーベルを引き抜きエリスに振るう。しかしエリスはその手を掴み格納されていたガトリングガンを至近距離から撃ちまくり紫色の機体の腕をちぎりとり、奪ったビームサーベルを横凪ぎに振るう。

「あああ！！」

ビームサーベルは紫色の機体の両足を切断し、紫色の機体は苦し紛れにトルネードガンダムに体当たりを食らわせてくる。

「うわあ！！」

エリスは体当たりをもろにうけその衝撃で息を吐き出して急激な酸欠となり、そのまま気を失ってしまう。

「恐ろしいパイロットだ…この程度の機体で私のメッサーラに此れ程のダメージを与えようとは…」

紫色の機体、メッサーラに乗っていた男は、手を伸ばしてトルネードガンダムを掴む。

「エリス！！」

そこへラナロウとマークがようやく駆けつけビームで牽制する。マリアのトーラスも回り続けているため、マリアも気絶している事も伺える。

「水入りか……」

男はエリスのトルネードガンダムのコクピットハッチをこじ開け、腕をコクピットに押し込んでエリスを引き抜くと可変し、頭の2連ビーム砲でトルネードガンダムを破壊し、飛び去った。

「エリス!!エリスー!!」

ラナロウは追い掛けようとするがマークのガンダムに掴まれ止められる。

「待て…ラナロウ、先ずはマリアの回収が先だ…」

「でもよ!!」

「ラナロウ!!」

マークに怒鳴られたラナロウは縮こまり、そしてさけんだ。

「ちくしょおおお!!!」

一方―

「まさか、あれのパイロットが女だとは思わなかった…」

男はメッサーラの手に乗る小さな少女をモニターから見下ろしながら先程の戦闘を思い返す。

「この娘ならば…この先の世界を…出来るやもしれん…期待出来そうな逸材だ…ふふふ…ふはは！！ハハハハハハハッ！！」

野望に燃える男の高笑いが何時まで響き続ける。男の名は―【パプテマス・シロッコ】木星帰りの男（ニュータイプ）である。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2268z/

機動戦士ガンダムGGENERATION-月光蝶の羽音

2011年12月16日23時54分発行